

アイン・スタンスラインの波瀾なる  
軌跡と彼が起こした奇跡について

著者／杞優橙佳

SAMPLE

想実堂

## 目次

|     |                     |     |
|-----|---------------------|-----|
| 第1章 | 闇の中から……………          | 1   |
| 第2章 | 飛翔……………             | 88  |
| 第3章 | 世界の果て……………          | 222 |
| 外伝  | ケルト・シェイネン、その肖像…………… | 268 |

## 第1章 闇の中から

### 1

ウブン1439年。

四方を深い森に覆われた山の麓で、黄昏がその村を覆っていた。

篝火がポツポツと焚かれた中央公園に、二人の女性と一人の少年がいる。

「あなたは、両親とは違うわね」

腰の曲がった老婆が、少年の頭を撫でた。隣の淑女は「学問も武芸も優秀なんて。誇らしいわ」

と少年を礼賛している。間に挟まれた十五歳の少年には、無邪気な笑顔。

「十年あったからね」

少年は笑みの裏側に、そんな本音を抱いていた。

「学問も武芸も、必要がないこの村で」

少年の動きを阻むように、老婆と淑女が左右を固め、村の儀式へ導いた。

「アイン、行きましょう。点呼の時間よ」

ユーグリット大陸エルゴル国ノスタルジア村。この村に生まれた少年こそが、物語の主人公アイ

ン・スタンスラインだ。彼は先ほどまでの無邪気な笑顔を引っ込め、凜とした表情で中央公園に築かれた舞台を見上げた。背後には村を囲う霊峰が聳える。

舞台に、横一列に老人たちが並んでいた。彼らは土地預かりと呼ばれている。霊峰に棲まう山ノ神から、村を預かっていると云って、村の運営は彼らが担い、村のルールも彼らが決める。

「故郷の土地を捨てたものと、その家族には、山ノ神の祟りがある。だから黄昏時には村の外に出てはならぬ。では……存在確認！」

号令で点呼が始まる。アインは最初に名前を呼ばれ、クリアな声で「はい」と答えた。点呼の終わった人間から自由行動の権利が与えられる。最初に呼ばれるような名前をつけたのは、名付け親である母親の知性の賜物といえた。

アインは人々を俯瞰できる場所に座った。村人の名前がひとつひとつ呼ばれていく。存在確認の取れない村人は罰を与えられ、家族まで悲惨な目にあった。村の至るところには関所が置かれ、看守が村人の入出履歴を管理する。管理は厳格で、村人が境界を超えることを阻んでいた。

霊峰の麓の小さな世界で、人々は「村で生き、村で死ぬこと」を定められている。わずか千人にも満たない村に、玉鋼のごとき純度の保守的思想が醸成されている。

「まわりと同じ感性をもてば、助け合って生きていけるのだ。村の外に出る必要はない」

土地預かりは声を荒げた。この管理された村で少年アインは育った。だが、彼の心は誰にも支配できない。彼の心をコントロールできるのは、彼だけだ。

「アイン！」

女の子の声が点呼をかき消した。崩れるようにして走ってきたのは、アインと同年の女の子、スクールの制服を着た少女ピーキュー・テックシーだ。彼女の母親とアインの母親は旧知の仲で、両家には家族のような付き合いがある。二人は互いに影響し合いながら成長し、気を許し、ありのままの姿を認めあっていた。彼女はアインの胸に飛び込むと、必死の形相でこう訴えた。

「大変なの！ ロングマンの妹ちゃんが、カルドラに連れて行かれて。いなくなっちゃった」

おお、と土地預かりから感嘆の声が上がった。カルドラは霊峰に棲む猪で、山ノ神の使いとされている。

「カルドラに連れて行かれたのなら、神に捧げられた証拠だ。村に福音が訪れるだろう」

アインは土地預かりを横目で見、女の子を顧みずに興奮している大人たちを目に焼き付けた。

「ピーキュー、ロングマンはどこにいる？ あいつも妹を探しているんだろう？」

「アインがナイフをつくった炉の近くに。ねえ、どうしよう」

「シッ。あとは俺がなんとかするから。ピーキューは普段どおり点呼を終わらせて」

「でも！」

「約束だ」

アインはピーキューを一方的に抱きしめて、誰からも愛される爽やかな笑みを浮かべ、走り去った。二人は村の誰もが知る、仲睦まじい恋人同士だ。

＊＊＊

「ロングマン！」

アインは山の裾野にあるレンガ造りの炉を目がけて叫んだ。

炉の前にはスクールの古き友人ロングマン・リンカードとエイサム・スコナティオが佇んでいる。

「エイサム。お前もいたのか。点呼終わっちゃうだろ。早くいけ」

「でもよ、ロングマンの妹が連れ去られるのをみたのは俺だけなんだ」

エイサムが頭の後ろで手を組んだ。

「そうかもしれないけど。俺はお前が村で生きづらくなるのが嫌なんだよ。ロングマンも一緒だ。

頼むから、俺に妹ちゃんがいなくなったときの状況を教えて」

「アイン、俺に手伝えることはないか」

ロングマンは青ざめた顔をしている。アインは人差し指を立てた。

「ひとつある。早く点呼へ行くこと。それだけだ。無駄なことを話している時間はない。端的にしろしく」

アインは二人から、今年十歳になるロングマンの妹が、カルドラに連れ去られたときの状況を二言三言聞いた。まだ何も話してないぜ？というエイサムを点呼へ向かわせ、ロングマンからも二言話を聞くと、レンガ造りの炉に立てかけてあった青銅のナイフと、炉に隠してあった青い宝石を手にとって、あっちだな、と森を指して駆け出した。

アイン・スタンスラインの特筆すべき才は、理解力と類推力にあった。偏見なしに物事を多方面から見られる理解力と、事実に基づく情報を類似性のある別の物事に展開できる類推力。この二つの能力が、彼を学問にも武芸にも秀でさせた。それでも彼が将来、自伝を書くなら「成功するのに理解力も類推力もいらない」と断定するだろう。少年時代の勝ち方など、大人になればアップデートされるものだ。大事なものはこれから見つかる。

アインは深い森を駆けた。

カルドラが子どもを引きずったあとが続いている。

「いた！」

アインの目の前に体長三メートルはある巨大な猪。月明かりを受けて、闇夜に白く輝いている。猪が口に咥えているのは、女の子の腕。その状態で森を引きずられたのだろう。女の子の体は痣だらけで痛々しかった。

「その子を、離せ！」

アインは青い宝石を左手に握りしめ、何かを念じた。途端、左手から銀色に輝く剣が生まれ、彼の手に巻き付いた。二千年前から世界には、この不思議な宝石、スピリットが落ちている。そして宝石から物体を復元する才能を持った、復元者と呼ばれる人々が、人口の一割ほどいる。

アイン・スタンスラインは左手の剣を振り上げ、カルドラに戦いを挑んだ。鼻息を荒げ、突進するカルドラ。アインはすんでのところで突撃を躲すと、カルドラの背中めがけて左手の剣を振り下

ろした。肉片が飛び散る。叫び、首を振って抵抗する獣。アインは足元に冷静な追撃を放ち、最後は青銅のナイフを首に突き立て、とどめを刺した。

「悪いね。運命を変えたがりなんだ」

ズルズルと引き抜いたナイフに、赤い血がベツタリとついていた。ふうと大きなため息が溢れる。幼い頃から野山で遊んできた彼は、もはや弓やナイフを使った狩りの達人だった。そんな彼でも、視界のきかない夜の森で、あれだけの大物を相手に大立ち回りをした経験はない。

「命、からがら」苦笑いがこぼれた。

ロングマンの妹は、腫れぼったい目でアインを見ている。

「ゴメン。怖がらせちゃったか？」

「怖かった……でも、いまは怖くない。アインが来てくれたから」

「それならよかった」

アインはあぐらをかいて座ると、女の子の頭をなでてやった。ふと見ると、カルドラの口元に、闇にしか見えない黒い宝石が転がっている。

「カルドラがどこから運んできたかな？」

裏側には八条の光が刻まれていた。その光を見た瞬間、アインに強いインスピレーションが走った。設計図が無尽蔵に脳へ流れ込んでくる。彼は衝動的に黒い宝石を復元せずにはいられなかった。

——これは運命だった。



「ホワイトボード？」

復元されたのは、ただのホワイトボードではなかった。アインの今考えていることが、板面に書き出されていく魔法のアイテムだ。

「そうか……そうだね」

この魔法のアイテムは、アイン自身の気持ちを再認識させた。

湧き水で少女と自分の返り血を拭ったアインは、中央公園に戻った。土地預かりたちに「カルドラは少女を放ってどこかに消えてしまった」と説明し、落胆させた。

ロングマンは涙を浮かべてアインに抱きつき、エイサムが「顔、土砂崩れしてるぞ」と冷やかした。ロングマンは普段不愛想なくせして、いざというときに感情が顔に出る。一方のエイサムは飄々としていて本心を見せない、アインとは違った才能を持つ少年だった。

「なあアイン。お前は世の中を力で変えるのか？ 知識で変えるのか？」

アインもこのときは、力と知識が、目的を達成するための両輪だと信じていた。だから彼は「優秀なら結果はついてくるよ」と口癖を述べた。

\*\*\*

翌日、アインは学校を終えると、ピーキューと共に市場へ出た。

「デートだ。何買ってもらおうかな」

ピーキューが空を見上げた。アインは彼女の頭をなでながら、ピーキューなら何食べても太らな

いよと言った。

「いやいや、私が食べ物要求しているとは限らないからね？」

アインは吹き出して笑い、市場へ走った。ピーキューもスカートをためかせて追いかけた。

市場は村の出入り口をわずかに超えたところにある。閉鎖的なこの村が、外界と接触できる唯一の場所だ。アインは市場で外界の話を聞くのが大好きだった。

エルゴル国では、全国民が六年毎に働く場所や住む場所を変える『大異動』が行われていた。家族すらも離れ離れになり、新しい土地、新しい人間関係で人生をやり直すのだった。

狭い世界で寄り添って生きることを強いられるノスタルジア村の人間からすると、エルゴルの人々は、家族と引き離されて何も感じない、冷血な人間ばかりなのかと疑ってしまう。だが、大異動が日常に組み込まれた世界では、家族と離れたくないという価値観こそが異端なのだろう。

アインは市場で大異動の話を聞くたびに、「ノスタルジアもエルゴルの一部だ。大異動を体験してみたいなあ」と膝を叩いた。ノスタルジアの土地預かりは、国王から直々に大異動に協力するよう要請があっても、故郷の土地に固執する。

「そりゃあ俺だって、故郷を捨てたくないという気持ちは理解できるよ。けれど、狭い世界で、似た者同士寄り添って生きることが、世の中をかえって息苦しくさせているんじゃないかって」

アインは市場で世界地図を購入した。資金はお手製ナイフの売却益だ。本当はもう一冊買いたかったが、どうしてもピーキューに買ってあげたいフラワーコサージュを見つけたのでやめた。黄色

の花が、無垢なピーキューによく似合った。

「アイン、その本はお母さんにあげるの？」

ピーキューはフラワーコサージュを大事そうに触っている。

「読み終わったら家に贈るよ」

アインの実家は本屋を営んでいる。本屋はノスタルジアで汚れ仕事とされていた。村の方針として、虚偽であっても、自分の持つ感情や感覚を頼りに生きる姿勢を重視したからだ。

「ふーん。それにしてもアインは本が好きだねえ」

「そうかな。ピーキューが言うならそうなのか」

ピーキューは偏見なしに人を見る。だから、アインの気づいていない強みを言葉にしてくれることがある。閉鎖的な村で、外の世界へ興味を持ち続けられたのは、確かに本のおかげだったかもしれない。

アインが自宅に帰ると、くたびれた女性が台所から顔を出した。

「おかえり、アイン。デートは楽しかった？」

アインの母、ティルテュ。この女性は村の人間からの執拗な嫌がらせを長年受けてきた。顔に刻まれた皺は、長い時間をかけてストレスに耐え忍んできた彼女の勲章でもあったろう。

「二人で世界地図を見ながら、どの国に住みたいかを話したんだ。楽しかった。なんだか勉強、頑張れそうだよ」

ロマンチックなこの少年は、学校でとびきり優秀な成績を修めていた。この村の義務教育は九年間のフォルクスコールと、三年間のギムナジウムという十二年間。しかしアインは十一歳でフォルクスコールの六回生を、十三歳で九回生を飛び級し、十五歳のいまはギムナジウムの三回生を飛び級すべく勉強に励んでいた。

「ごめんね。この村に生まれてなかったら」

母は目を伏せた。けれどすぐに笑顔をつくった。

「勉強、無理しないでね」

母はいつもアインのことを気にかけてくれる。だがアインは母のその愛が、自分への贖罪の意を含んでいるとも悟っていた。

「母さんこそ無理をしないでほしいよ」

この夜アインは、勉強が終わってから、燻製づくりに精をだした。カルドラを仕留めた夜に、部位を均等大きさに切り出して、塩とハーブを入れた調味液に漬けて自宅へ持ち帰っていたのだ。昼間学校へ行っている間で乾燥させ、夜に氷を使って熟成させる。これを二三日行えば干し肉が完成する。

アインが干し肉をつくった理由は墓参りだ。彼はこの時期に欠かさず墓参りをした。

晴れた日を選んで村の墓地に向かうと、アインは墓石を前にあぐらをかいた。干し肉を墓に手向けてひとりつぶやく。

「ブライアン。君は今どうしてる？ 俺は今、正しい道を歩めているかな？」

彼はもう一度、ブライアンとつぶやいた。

そして故人を偲ぶように、干し肉を頬張り、墓石を撫でた。

この少年の十五年間は、悲しい別れに決定づけられた感謝と贖罪の軌跡だった。

## 2

アイン・スタンスラインと、一つ下の弟ブライアンはこの村で生まれた。

アインは、知恵遅れだった。二歳半になっても言葉がうまく操れず、単語で会話するのが精一杯だった。一方、弟のブライアンは満一歳で巧みに言葉を操り、物事を情緒豊かに表現できる天才で、村の大人からも期待され、愛されていた。

けれど両親は二人の息子を隔てなく愛し、育てた。家族は貧しかったが、平穏な日々を過ごしていた。母親は子どもたちへ向かってこう祈った。

「あなた達が、誰よりも幸せな人生を過ごせますように」

\*\*\*

アインの母親、ティルテュ・スタンスラインは、隣国オースティアで弁護士をしていた。彼女が夫とともにノスタルジアへ移り住むことになったのは、親友アイナ・テックシーの働きかけがあっ

たからだ。

「いつか村に来てほしいの。約束して。後悔はさせないから」

土地預かりに認可を得て、村の外のアカデミーへ通っていたアイナは、そこでティルテュと友人になった。二人はいつか同じ村に住むと約束し、互いに約束を守ろうとした。

外国人を村に住まわせるのは問題だと村人は大反対したが、人気者のアイナは反対派をおさえて、ティルテュを村に住まわせた。

しかし平穏な日々は長くは続かない。

ティルテュの夫ルビノ・スタンスラインは、傭兵上がりの不器用な男で、村の仕事を一つも満足にこなせなかったのだ。アインが三歳になると、家族は生活に困窮するようになった。

ルビノは、いつしか自分には傭兵稼業しかないと考え、生活費を稼ぐために紛争地へ出稼ぎに向かった。不運なことに彼は、日帰りのつもりで村を出た戦場で敵に囚われ、命からがら逃げてきたときには、三日が過ぎていた。点呼を欠席し、存在確認を取れなかった彼に、村の人々は冷たかった。彼は裏切り者のレッテルを貼られ、村から追放されてしまう。

これ以降村人たちは、ティルテュに対して山ノ神の祟りがあると罵詈雑言を浴びせるようになり、執拗な嫌がらせも行なわれた。

「アイナが招待したというので大目に見てきたが、あんたは本当に駄目だね」

「アイナに迷惑をかけるな」

ティルテュにとって、こうした心無い批判が一番堪えた。彼女は人格者だ。それゆえ、家族に対して浴びせられていた罵詈雑言がアインやブライアンに耳に入らないよう苦悩した。嫌がらせの手紙や壁の落書きを一人で消し、怒りや悲しみを抱え込み、ついに心の病を発症してしまった。

人格者である彼女でさえも、『出来損ない』のアインに対して強くあたるようになり、弟のブライアンを溺愛するようになった。

「私、こんな嫌なやつだったっけ」

ティルテュは病気の進行により通院頻度が増え、家を空けることが多くなった。

そして運命の悪戯が家族を襲う。四歳のアインが、ティルテュ不在の自宅で火の灯ったロウソクを倒し、火事を起こしてしまったのだ。

燃え盛る建物からアインを救い出したのは、三歳の弟だった。この事件によって弟は大火傷を負い、帰らぬ人となる。これがアインの数奇な運命の始まりだった。

もしこの出来事がなければ、アインは仲睦まじい恋人と添い遂げ、村で一生を終えたかもしれない。しかし高貴な精神は時の濁流へ漕ぎ出すことがなく、一つの完成を見ることもなかっただろう。

『出来の良い弟』を失ったことがわかったと、病気のティルテュはアインに暴力をふるい、「あなたなんて生まなければよかった」と自分を責めた。

知恵遅れだろうと……。アインは自分が何をしたか理解していた。脳はこのとき、鮮明に動き出した。アインは、頭に文字があるのに、手がそれを表現してくれないもどかしさと戦いながら、母

親ティルテュへの懺悔を手紙にしたためた。文字は雅趣のある金釘流だった。手紙を母の前で読み上げると、母は何度も謝罪し、涙を流して少年を抱きしめた。少年は母親からの愛情を感じながら、天才の弟が成し遂げていたはずの物事を考えるようになった。

アインは外国の文献に興味を持ち、弁護士で読書家だった母親の書架から月十冊の本を読破し続けた。世界の歴史、法律、地理、天文学、数学、気象学、統計学……。彼は次第に村で手に入らない本を母親にねだるようになった。

母親は息子のために、村唯一の本屋を経営した。土地預かりは、崇り神にふさわしい汚れ仕事だと揶揄したが、母親は経営をやめなかった。おかげでアインは本を読み続けることができた。

そして二年が過ぎ、三年が過ぎ。

アインは村での暮らしの中で、目標を定め、計画と実行、評価と改善を繰り返すことが、物事を良くしていくポイントだと知っていった。

例えば。真っ直ぐに歩きたいと考えて、砂場で一歩足を踏み出せば、足元に自分の足跡が残っていく。足跡を目安に次の着地点を決めれば、いずれ歩いた軌跡がまっすぐな線になるだろう。

アインは、人生もそのようにありたいと考えていた。彼の前にはいつも、天才であった弟の影がちらついている。

「君が生きていたら、どのように生きたかな」

記憶にしかない聡明で明朗闊達な弟を目標にする。内省的な自分と、外交的な自分を両方育て



ていきたいと考え、本を読んで知識を広げるとともに、物怖じせず誰とでも会話をするように努めた。会話の中で、知らなかったことを教えてもらえれば幸運だし、自分の悪いところを指摘してもらえたら、改善する課題が見つかる。理不尽に怒る人や、不機嫌な人と対峙し、ぞんざいに扱われたら、許すことで自分の度量を広げられる。自分の成長の遅さに悔しさを露わにすることもあったが、彼は日々挑戦を続けた。

「今日は何を議論しようか」

いつしか、彼は人生をより良くしていくための議論が好きになった。その中で彼は時間が有限であることを意識していく。きっかけはアインが八歳の頃、六歳から十八歳までの男女を集めて、『人生で大切にすべきもの』を議論したことだ。愛、地位、名誉、健康、夏休みや、お母さんという意見も出た中、アインは『時間』を大切とする意見に感銘を受けた。やりたいことをできず命を落としてしまった弟に、一番与えたいものだったからだろう。時間を明確に意識した時、アインには九年間のフォルクスコールと、三年間のギムナジウムという十二年間の義務教育が『時間』を闇雲に消費させているように思えた。

「道理を味方にして、常識を超える」

アインは学校に飛び級を認めさせた。必要な学力を得ることと、浮世離れしないために年相応に遊ぶことを計画し、ほとんど軌道修正することなく実行した。その生き様はまるで二人分の人生を生きるみたいに、慌ただしかった。

幅広い属性の友人と語らうことを好んだかと思えば、巣箱を作って動物を飼ったり、鍛冶と狩りに興じたり、子どもたちだけで村を出て隣の様子を見に行く大冒険をした。

日が暮れるまで遊んだら、大人との時間も大事にする。牛の世話をして馬糞にまみれたことも、カリグラフィに傾倒して村の正式文書を書いたこともある。四歳の頃から、文字を書くのは苦手だ、なんていいながら。

彼は大人と子ども、異なる二点の視野で物事を見、生きていく。

恋をして、欲動に心を奪われそうになる時さえ、彼は愛だけを育て、欲を殺し続けた。

彼の心底には、弟に受けた恩を世界へ還すという信念がある。それが世界に人生を捧げることになっても。

\*\*\*

「アイン、朗報よ。最後の手紙が届いたわ」

ティルテュがはしゃいだ様子で言った。手にはギムナジウムから送られてきた封筒が握られている。天才として村に名を轟かせたアインは、十五歳で村のギムナジウムを卒業することが決まった。アインはついに、将来を切り拓くための、最後の試験に挑むことになる。それはカルドラを倒した日、ホワイトボードに刻まれた彼の計画。この山ノ神に縛られた村の『境界を超える』こと。

そして生まれた国を捨て、隣国オースティアのアカデミーへ進学することだった。

「君は飛び方を忘れてしまったの？」

ギムナジウムで飼育係をしていた頃、アインは何度も、鳥籠で育てた鳥が飛べなくなる姿を見てきた。飛べなくなった鳥は、人の介助がなければ生きていけない。しかし介助を受ける鳥は、空を飛びたいという願望など最初から持っていないように、幸せそうだった。

「楽な方に流れて、飛べなくても生きていられる環境に慣れてしまったら、もう飛ぼうとは思わないのかな。自分に空を飛べる才能があるなんて、思いもしなくなるのかな」

自由な思想で世界を闊歩する少年、アイン・スタンスラインにとって、故郷の村は鳥籠に等しい。彼は村のしきりに従順でありながらも、世界に飛び立ちたいという気持ちを枯らさず持ち続けていた。人の介助を受ける鳥のように、自分の才能を忘れてしまっただけではない。この鳥籠をいつか出なければならぬ。彼はそう考えていた。

しかしそんな鳥籠で出会った友人たちは、アインの人生にとってかけがえの無い宝物でもある。幼なじみで恋仲のピーキュー・テックシーは、弟を自分の手で殺めてしまったアインの心を癒やし、アインに人から愛されることの価値を教えてくれた。彼女の愛がなければ、アインの前向きさは生まれてこなかっただろう。友人たちは、大人にコントロールされる子どもの顔と、自立した大人の顔を使い分けることのできる聡明さを持っていた。

だが、ただひとり。大人に齒向かい続ける男がいた。ギムナジウムで出会った五つ年上の友人ウエルズ・バレンツエーガだ。ウエルズは学校へいく意味を見いだせず、学校をサポートはアトリエに籠もって油絵を描く生活を繰り返し、フォルクスコールを十年かけて卒業している。世間体を気にする父親はウエルズを監禁し自殺。母親に救い出されたウエルズは、父の書いた遺書につばを吐いたという。母親は病に倒れ、ウエルズは結局ギムナジウムに通うことなく二年間を看病で過ごし、さらに世間から離れた存在になってしまう。

十九歳でギムナジウム一回生となったウエルズ・バレンツエーガは、十四歳のアイン・スタンスラインと出会った。アインは常識的な人生を外れたウエルズに興味を持ち、喧嘩を繰り返しながら友情を築いていた。

ウエルズは人の本質に深く迫る男で、「何故？」という言葉で口癖にしていた。彼は出来事の要因や因果を見つけ出すことを好み、アインに対しても、「何故？」を幾度となくぶつけた。特に追求したのは、アインが隣国オースティアのアカデミーへ進学する理由だ。

「何故、エルゴルのアカデミーではダメなのだ」

「なぜなら」と、アインは指を立てて答えた。

「エルゴルのアカデミーは娯楽だから。エルゴルで政治を動かせるのは、格闘大会で一番となった人間だけだ。俺は世界を変えられる場所で戦いたい」

ウエルズは言葉を噛み締めながら頷く。

「二つ目を問おう。何故、オースティアなのだ」

「なぜならオースティアは後天的な努力を認める国だから。あの国はアカデミーの主席が、閥徒……国政を担う政治家に推薦される仕組みがある」

力強い言葉。ウェールズはアインの目をまっすぐに見た。

「何故、政治。権力に関わろうとする」

「なぜなら世界の問題解決に関与したいから」

ウェールズは眉間にしわを寄せた。

「四つ目の何故。何故、お前は世界の問題解決に関与したいのだ」

「それは、愛と才能に溢れる弟が俺の物差しだから。弟が生きていたら、世界の問題をどれだけ解決できたかわからない。弟みたいにできる自信はないけど、俺は弟にもらったものを世界に還す義務があると信じてる」

アインは恥ずかしげもなく言い放った。ウェールズはやれやれと両手を上げる。

「最後の何故。何故、弟のことをそれほど高く評価するのだ」

「そうだな。弟は、俺が母親に虐げられていた頃、俺を一人の兄として扱ってくれたから、かな。一番苦しかった時に、生きる原動力をくれた記憶は何物にも代え難いもの。違うかな」

アインの選択の理由を聞いたウェールズは、穏やかな笑みを浮かべていた。ウェールズは芸術の国アルテリア行きを熱望する男だった。彼もまた、自分の躍進を阻む村の常識を破壊し、境界を超

えたいと考えていた。

\*\*\*

立ちをはだかつているのは、閉鎖的な村と、自由な外との境界線だ。この村には故郷の土地を捨てたものと、その家族に、山ノ神の祟りがあるという言い伝えがあり、ゆりかごから墓場までを、村で過ごすことが強要されている。

アインの父親が出稼ぎのために村を出て戻らなかった時、村人たちは『祟りがある』と母親を責め立てた。母親は村人に頭を下げ、二度とこんなことをしない子どもたちに育てていくと誓った。これからアインが村を出れば、母親は村中から再び批判され、追いつめられるに違いない。

アインの記憶には、母親から浴びせられた冷たい言葉がこびりついている。彼は今も、辛い記憶は消えないものだね、と苦笑いするだろう。

しかし彼は、母親が村人によって苦しめられることを、当然の報いだとは考えなかった。村の大人に気に入られる少年を演じていても、母親を売り渡すほど腐ってはいない。自分自身の夢をかなえるために、誰かを不幸にしては意味がないのだ。

アインにとって、この村の記憶は否定したくない大切な思い出だ。恋人と村で一生を添い遂げる選択肢が頭をよぎったことだってある。だがアインは鳥籠の外に興味を持ち続けた。彼の魂は、弟に受けた恩に報いることを宿命付けられている。村の常識を覆したいというウェールズの情熱にも支えられ、アインの熱は、心は死ななかった。

アインはホワイトボードを復元してウェールズの意見を求め、『何故、人々が山ノ神を信じているのか』について、原因を探った。山ノ神の支配下で、村に閉じこもる生活が続けるうちに、村人は年々貧しくなっている。いまではエルゴルの国民食のカレーが贅沢品になってしまった。おにぎりひとつで一日を過ごす友人もいた。人々はなぜ山ノ神にこだわり、貧しさに耐え忍ぼうとするのか。山ノ神の崇りとは何なのか。

「何故、山に神がいると感じたのか」

「何故、山が命を支配すると考えたのか」

二人はホワイトボードに書き込みを続け、「何故？」を繰り返した。村の外から仕入れた歴史書に目を通し、村の成り立ちを追っていく。その根源を突き止め、原因を取り除くために。

そして呪われた原因に気づいた。

呪いは、エルゴルの初代国王アレクサルの弟、イブカサルに起因していた。かつてイブカサルは兄との確執で心を病み、この村に聳える深い緑に覆われた山に救われた。

故にイブカサルはこの山を神の山と名付け、国策である大異動に背き、土地へ定住することを決めた。兄アレクサルとしても、弟を傷つけたのは自分だという後ろめたさがあったのか、彼の決定に強く文句は言えなかった。イブカサルが始めた大異動への反抗は、古い言い伝えに変貌していく。故郷の土地を捨てたものとその家族には、山ノ神の崇りがあると。言い伝えはいつしか力を持ち、村人は、村を見下ろす森厳な山に畏怖の念を抱いた。そこは二千年前の最終戦争で亡くなった神が

祀られている、神の山だと信じてやまなくなった。

それは、大異動という家族の絆を引き裂く国の施策に反発した人々の願望だったのだろう。いつしか、ノスタルジアは家族と一緒に過ごしたい人々の聖地となった。人間の願望は山ノ神という信仰対象を創り出し、自分たちの主張を正当化する武器にした。その主張が独り歩きし、人々を縛り付ける呪いとなって今に存在しているのだ。

二人はこの呪われた神を取り除くためのアイデアを模索した。設定すべき課題は「何故？」という因果を引責するものではなく、『どのようにして』という発展の連関でなければならない。

「収穫祭を利用したらどうだろう」

十月第二週末に開催され、山ノ神の恵みを祝う収穫祭。祭りのクライマックスには村民代表の挨拶があり、この年の挨拶は村のカリスマとなったアインが行なう予定だった。山ノ神を殺すチャンスはただ一度、この挨拶の中にあった。少年たちは失敗の許されない挑戦に臨んでいく。

\*\*\*

収穫祭当日。村中が陽気なムードに包まれ、今年の豊作を讃える。午後から夕方にかけては、子どもたちの遊戯が行われ、大人たちは感動の渦に包まれていた。村の歴史がこの後も続いていくことを、誰もが疑わなかった。祭りのクライマックスが来るまでは。

舞台が整った頃。アインは、中央公園の舞台の階段をひとつずつ踏みしめて登り、村人の前へ堂々と立った。誰もが彼の一挙手一投足に着目していた。



「この故郷の山に、私は育てられました。あらゆる辛さも楽しさも、この山と共にありました。私はこの山が大好きで、これからも山を忘れることはありません」

彼はいくつも感謝を述べ、頭を下げた。

そして、静かに言う。

「ですが、山よ。あなたは、俺たちの人生を、縛ることはできない」

アインは手元のスピリットから『消えない松明』を復元し、森へ放った。山一面に油絵の具を染み込ませた縄が張り巡らされており、松明の炎を山の隅々に届けていく。アインと仲間の仕掛けた点火剤だ。瞬く間に山は炎に包まれた。

村のカリスマの突然の凶行。人々は悲鳴をあげた。なぜ自分たちのコントロール下にあった子供がこんなことをする？ 自分たちと同じ信仰を、この少年も信じていたのではないのか？

しかしアインは、「そんなものはあんたたちの願望が創り出した幻だ」と言い放った。

そして村人の悲鳴を切り裂く声で吠えた。

「聞こえるか山ノ神よ！ あんたが本当にいるのなら、この炎を消してみろ！ 神風を吹かせ、人の愚かな行いを止めてみせろ！ その程度のこともできぬ神なら、そんなものは神じゃない！」

アインの言葉は、閉塞感を突破しようとする村の若者すべての言葉であった。

燃え盛る炎は、山ノ神の畏敬も祟りも焼き尽くしていく。実体のない、言葉だけの存在である神からの解放。それは紛れもない、魔法からの世界解放であった。

\*\*\*

その後、村では、山ノ神を信じる人々と、他の人々との間でいさかいが生じた。だがこの争いはスムーズに収束していくことになる。アイン・スタンスラインと十五年間を共に歩んできた村の若者たちは、既に新しい世界を受け入れる勇気を携えていた。そして村の未来は若者たちが創り出していく。

神の棲む、山を失った村人は、アインの母親に罪の償いを求めるのではなく、山ノ神の呪縛から村を解放する方向へ進み始めた。故郷の人々が前を向いて歩き出していく中、アインとウェールズは故郷の村を出て、それぞれの目的地へと旅立っていく。

「神様は、アインのために風を吹かさなかったのかもしれないね」

ピーキューは、二人の背中をいつまでも見送っていた。これが彼との永遠の別れになることを覚悟しながら。

## 挿絵ページ

※試し読みでは表示されません。

アインが村から持っていったのは、いくつかのスピリットと一冊の本だった。実家が本屋という恵まれた環境にありながら、本を一冊しか持ってこなかったのは、本好きのアインらしくない。しかし、どれか一冊を選択するなら、アインは必ずこの本を選ぶだろう。

選ばれたのは、「無限の枠組み」という古今東西の枠組みを集めたハンドブック。性別から始まり、資本家と投資家と労働者といった社会の枠組み、人類が数千年をかけて蓄積してきた叡智である思考の枠組みなどが記録されている。

「どの枠組みに倣って、どの枠組みを超越するかを間違わないこと。それができれば、世界の問題を解決できる」

自分の言葉を証明するため、アインはゆく。

オースティアに入国したアイン・スタンスラインは、数か月の受験勉強を経てエル・クリスタニアのアカデミーを受験した。この国で最も学力が高く、国内の才知溢れる若者が集い、政治家も多く輩出しているアカデミーだ。アインはこの難関校の入学試験で、数学と語学で満点を取った。

このあとは満点をとったがゆえの苦労があった。カンニング疑惑が浮上し、学長に呼び出されたのだ。しかし堂々と面接に参じたアインを学長は笑顔で迎え入れ、碎けた面接で過去について問うた後、無事合格の印を押した。話をする中で疑惑は払拭されたし、学長はアインの野心的な考えに

意義深さを感じていた。

「世界の問題解決をしたい。大きな夢だ。もう私などは描くことのできない、果てしない夢だ。だが、それがいいじゃないか」

エル・クリスタニアアカデミーの学長室で、学長は積み上げられた書類の間から身を乗り出した。怡幅のいい体が書類の山を崩さないか心配になる。

「二千年前の最終戦争で生き残った人々は、崩壊した世界の中でも、わずかな関係性を頼りに繋がっていった。似た趣向の人々が集まって特色ある国の数々が生まれ、時を刻んだ。発明家を賛美する国、芸術家を賛美する国、資本家を賛美する国、識者を賛美する国。成り立ちは違えども、人の数だけ国があった。そして千年が経ち、二千年が経ち、いつしか人々を結びつけたわずかな関係性は、深いつながりに変化していった。いまや人々は、自分が望み、好むものが集まった国に住んでいる。居心地の良い閉じた世界で、趣向の似た人々との交流を楽しむにかまけ、他国との交流や情報伝播を疎かにしている。ウブン1436年の世界は、各国が孤立しているのだ」

学長の背中から陽がさした。窓の外には中世の城塞都市の面影を残すエル・クリスタニアの町並みが広がる。背の高い教会を中心に、オレンジ屋根の石造りの建物が並んでいた。

「皆、それなりに幸せだが、ある種の閉塞感を感じてもいる。だが、世界の流れを変えることなど、個人にできるだろうか。いや、できるはずがない。問題は個人で取り組むには大きすぎる。誰もが諦め、問題に取り組むことを放棄している。優秀な若者よ、君はそれに取り組むというのだな？」

ならば私は、君の未来を見てみたい。エル・クリスタニアアカデミーへようこそ！」

学長は握手を求めた。彼らはお互いを、ひと目見て気に入ったのだった。

\*\*\*

ウブン1436年四月。エル・クリスタニアアカデミーに入学したアインは、これからの人生——自分のあるべき姿<sup>T。b。</sup>を考えた。彼は現状とあるべき姿<sup>A.s。T。b。</sup>の差異こそが問題で、両者の差を明らかにして、問題の大きさや特徴を正しくつかむことが、問題解決の足がかりとなることに気づいていた。

目標、オースティアで権力を手に入れる。それに対する一番の近道は、エル・クリスタニアを主席で卒業し、政治家になること。そして派閥の中で周りに認められ、出世街道を駆け上がっていくことだ。そのためには学問と政治に秀でていることはもちろん、オースティア内外の知識人とつながりを持ち、良好な関係を築くことが必要だった。つまり彼のあるべき姿は、学問を究めながら、コミュニケーション能力、聴く力と話す力を高めること。

なかでも話の起点となる興味深い出来事——金や権力のある人々と付き合い、突出した成果、旅や食やスポーツ、酒・異性・ギャンブル、ハチャメチャな失敗といった経験を得ることが大切だった。

アインはエル・クリスタニアの社交部を訪ねた。本校の社交部は、四回生の部長ユミル・ド・コノルーの人脈によって、卒業生の政治家を巻き込んだ大規模なパーティを行なうことで有名だった。

「社交部は、年会費として百万エレンをいただきます」

部長のユミルは新歓パーティで宣言した。百万エレンといえば学生の一年間の生活費だ。どんな世間知らずでも、この一言で部活を続けるのが並大抵でないことはわかった。

だからといって富豪の息子だけが社交部に所属している訳ではなく、貧しい家庭の学生も部活を続けていた。その会費がどこから出ているのかといえば、答えは三ヶ月に一度開かれる社交パーティだった。その場で政治家や外交官にパトロンとなってもらい、援助をもらう仕組みだ。

アインは日々の暮らしもままならない極貧生活の中、社交部の活動を続け、身だしなみに全資金を投じて、初めての社交パーティに臨んだ。出会ってからのたった一秒。第一印象に全てをかけた。挨拶に一言返してもらいさえすれば、そこから先には自信があった。

若くしてギムナジウムを卒業したアインを評価する政治家は多く、なかでも新興都市セレスの立ち上げに貢献した閥徒ロンドゥール・モンペリオが彼に入れこんだ。

アインはロンドゥールから五百万エレンの出資を受け、社交部の獲得出資ランキングの二位に躍り出た。社交部では、金による評価は何よりも正確というユミルの意向から、出資獲得金額によるランキングを設けていた。

へレールには乗れたかな

アインの計画はいつも、レールに乗ってから始まる。

虎は、伏する。

\*\*\*

アインは社交部に所属して成果をあげながら、オースティアの知識人が集うバーでバーテンダーを始めた。彼は人生を狂わせる三つの趣味——酒・異性・ギャンブルの中で酒を最も気に入っていた。嗜む老若男女を幸せにし、本音を話させてしまう魔法の飲み物。彼はバーテンダーの仕事を通じて様々な酒の作り方を学び、酒の魅力を実践的な知恵として頭に染み込ませながら、バーを訪れる多くの知識人と交流を深めていく。

アインの謙虚さは多くの人に好かれた。彼は誰にでも興味を持ち、話を聴く姿勢を持って、他者と接していたからだ。結果として多くの人が、アインの話を聞いたがった。話を聴くことが、話を聴いてもらえる最大の秘訣だった。

いつしかアインの逸話はエル・クリスタニアのアカデミーに轟いた。例えば、お客様の話を聴くと誓ってバーの仕事をしていたら、次の日の夜になっていたとか。話が盛り上がった結果、アインの店で知り合ったお客様同士が新たな会社を立ち上げたこともある。休日には、ダンスを好む社交部の女友達とともにショッピングを楽しみ、エル・クリスタニアの街中で売られていた小さなスピリットからオルゴールを復元して、音楽にあわせて踊りを舞った。いつしかエル・クリスタニアの公園がダンス会場になり、ダンスがエル・クリスタニアの名物イベントとなった。

「あなたは誰より優秀ね」

社交部の女友達がアインをおだてた言葉だ。アイン自身、弟のように優秀であることを望んでい



た。だからこの称賛は彼を強く勇気づけた。

アインはさらに行動的となり、羽ばたく。

ボランティアへも進んで参加した。特にオースティア東部の無国籍地帯で、貧困に苦しむ人々へ配給を行なうボランティアは、彼の問題意識を高めた。彼はそこで出会った孤児の少女に社交ダンスを教え、月明かりの下、共に踊った。

紳士の嗜みとして馬術を学び、馬術競技にも参加した。その中でヴィオラの弦に馬の毛が使われていると聞いた彼は、好奇心を刺激されヴィオラを始める。音楽の才能を発揮し、基礎を三ヶ月で習得した彼は、豊富なインスピレーションで即興音楽を好んで奏でた。上手いかどうかはとにかく、初心者なので甘めに見てほしいといいながら、バーで音楽を演奏し、客から称賛やアドバースをもたらした。酒を嗜みに訪れたユミルがお世辞で腕前を褒めると、ユミルが褒めた腕だと囁く愛嬌も見せた。

アインはアカデミー生活で豊富なエピソードと人脈を着々と積み重ねていた。

\*\*\*

アインに転機が訪れたのはアカデミー入学から八ヶ月ほど経った頃だ。

きっかけは彼が五百万エレンを出資された社交パーティーで、七百六十八万エレンを獲得して獲得出資ランキング一位となった同級生のマスマティカ・アスロットという女性だった。

思い出してみると、アインは五百万エレンの出資をもらえた時、正直なところ、獲得出資ランキ

ングで一位を取れると考えていた——實際三位以下には三百万エレンの差があった。しかし予想に反してアインは二位。勝利を確信していた彼は素っ頓狂な声を上げた。

「嘘でしょ？」

「ごめんね、私にはやることがあるの」

さっそうと去るマスマティカ。

その姿にアインは後ろ髪を引かれた。彼女はあべき姿をはっきり見据えて生きている。アインは彼女を尊敬し、彼女が何に突き動かされているのかを知ろうとした。

理由を知ったのは、八ヶ月後。

そしてアインは、彼女とオースティアのあるべき姿を共有することになる。

マスマティカは、両親の復讐のために生きていた。両親は正義感に溢れる政治家だったが、同僚に無実の罪を着せられ、追いつめられて、最後はダウンタウンのビルから身を投げた。父親の死を聞いた彼女は、オースティアの政界にはびこる悪と戦うことを誓う。彼女は当時マスマティカの父親と敵対していた派閥のリーダーであるマルルト・ストラトスを疑った。マルルトが父親を殺した証拠などなかったが、彼女の直感がそう告げた。

彼女が突き止めたのは、マルルトに十二人の手下がいることだった。

「マルルト十二人の使徒と呼ばれる構成員。三人は劇団員。一人は学生、チアリーダーのクイーン

ビー。一人は建築士。一人は医師。一人は科学者。一人はピアニスト。一人はキャバレーの女性。一人は記者。一人はデザイナー。一人はホームレス。マルトをリーダーとするその組織は、社会に入り込んでいる」

マスマティカはこの十二人の行方を追っていた。誰かひとりからでも、マルトから協力を要請された証拠を得られれば、マルトを告発することができるはずだ。マスマティカの十八年の人生は、この復讐に捧げられた。

アインはマスマティカの話を聞いて決意を固めた。もちろん彼の胸には、オースティアにはびこる悪をそのままにしたくない気持ちもあった。だが彼が最も強く感じたのは、目の前の十八歳の女性、そのきらびやかな今も未来も投げ捨てて、復讐の輪廻に身を委ねている事実だ。世界の問題解決を誓う彼の信念は、国の政治を動かしている悪も目の前の女性も放ってはおけなかった。

アインは社交パーティーやバーテンダーの仕事を通して、マルトへの足がかりをつかもうと尽力した。エル・クリスタニアの著名人に話を聴くための隠れ蓑として新聞部に入部し、インタビューと称して財界の有名人を訪ねる活動も始めた。

彼は十六歳で世の中の仕組みを理解していた。つまり権力者は、権力者同士でつながっているとすることだ。マルトというオースティアの最高権力者直属の部下であれば、他の権力者のネットワークに引っかけってくるはずだ。

アインの考えは正しかった。インタビュー活動の中で彼は、マスマティカの両親が自殺した当時、

新聞社において異例の早さで昇格した記者がいたことを突き止めていた。

「この人物が物語の鍵を握っている」

アインはそう直感した。この記者への挑戦は、人生を危険に晒す扉の入り口かもしれない。だがアインは勇敢に、恐れを抱きながらも前に進むことを選んだ。

5

アインはホワイトボードにペンを走らせていた。新聞社において異例の早さで昇格した記者。この記者の心をつかむためには、インタビューを取り付けるためには——。書きなぐった文字はいっしか線で繋げられ、ツリーを描いていく。一つの課題を頂点として、「どうすれば？ ○○するためには？」とアイデアを発散したり、発散したアイデアを「○○すると？」と統合したりして、解決すべき課題を具体的な行動へ落とし込む方法をロジックツリーという。アインはインタビューを取り付けるといふ課題に対してツリーを描き、花束を添えた手紙を送るアイデアに行き着いた。

十六歳の少年が花束を添えて手紙を書けば、誰だって興味が湧く。年相応以上に礼節をわきまえること——これは若者が直情的で軽率だという常識を覆すギャップであり、少年にとっての武器となる。実際、この記者も前のめりでアインとのインタビューを承諾した。インタビューを確約させた後、アインは『記者がマルルトの部下である』ことを確かめる戦略を練った。

例えば当時の事情を知っていることや、マルルトの指示をこなしていたこと。それを明らかにできれば――。考えうる選択肢をツリーに書き表したなら、問題に対してのアプローチが見えてくる。入念な準備をしたアインは、爪先一つの手入れも欠かさず、記者との対談に挑んだ。

記者はアスロットの亡霊が十六年の歳月を経て、現代に蘇るなど想像していない。ましてアインは十六歳。事件とともに生まれた。それゆえアインは、マスマティカの聞き出したい情報を簡単に引き出すことができた。

記者がマルルトの手下の一人であること、メディアを使った情報操作を担当していた人物であることは間違いなかった。対話が深まる中で、アインはこの記者の協力を得られないかと考え始めた。もし記者の持つ情報を得られれば、マルルトを退陣に追い込むことができるはずだ。

しかしマルルト・ストラトスのきめ細やかさは想像を絶していた。二年前、記者の子どもが六歳になった時には、花束付きのランドセルが送られてきたそうだ。それから本や文房具を添えた手紙が毎年送られてくるという。

記者はマルルトに強く感謝しており、言葉の節々からマルルトへの傾倒が見てとれた。一六歳のアインは、自分の人生と同じ時間、深い人間関係が維持されていることに感服し、記者とのインタビューを潔く打ち切った。

へこまで配慮が行き届いているなら、他の関係者からも情報は一切出てこないかな」  
アインが諦めかけた時、記者は最後に自分の人生を総括してこう言った。

「この十六年、私は自分を嵐の中に置くよりも、安定した山道を登ることを選んだ」

アインは、なぜこの記者が『自分を嵐の中に置く』ことと『安定した山道を登る』こととを対比させたのが気になった。

記者は、自分の人生のあらゆる全てを肯定的に捉えているわけではないように聞こえる。アインは、記者の側に『自分を嵐の中に置く』ことで成功した人物がいるのではないかと考えた。だがその手がかりは見えない。

アインとマスマティカによる搜索は、暗礁に乗り上げた。しかし、アインのバーに訪れたダウンタウン出身の人物から一つの噂を耳にする。十六年ほど前、エル・クリスタニア南部に位置するスラム街で、貴族然とした風貌の男が乞食にアイテムを配っていたというのだ。貴族がスラム街に足を踏み入れるなど、オースティア建国以来三百年間で一度もないことだった。アインとマスマティカはこの男を探し出し、話を聴いた。マルルト十二使徒のひとりで元ホームレスと呼ばれたこの男。彼は、今ではスラム街の星ジャンクスターとなっていた。

「ようこそ、お嬢ちゃん。君のことは覚えてるぞ。不思議なものだ。俺は君のことを覚えているのに、マルルトは俺のことなど覚えちゃいない。ならば俺は、風の赴くままだ」

ジャンクスターは不敵に笑った。彼はスラム街の人間を使い、マスマティカの両親を追いつめ役割を担っていたことを飄々と話し、マルルトとの取引の証拠をアイン達へ手渡した。

「どうしてこれを俺たちに？」

「自分という存在が、ただ歴史の闇に消えていくことが気に入らないのさ。なあ少年。君は俺を歴史に刻んでくれるだろう？」

スラム街を牛耳り、身の安全を確保したという自負もある。ならば、「勇敢な少年たちが自分の協力によってマルルトの悪事を暴き、オースティアの政治を動かすという、刺激的な未来に賭けるのも悪くない」とでも言うのだろうか。この、ふてぶてしい博打打ちの男——アインは、彼こそが記者の意識にこびりついていた『自分を嵐の中に置く』成功者だと確信する。

ジャンクスターの資料は、エル・クリスタニア最大の製薬会社が、マルルトの企みに関与していたことを示していた。マスマティカはその中でも、薬の生成にかかわった男を敵視した。十二人の使徒の一人、医師に違いない。資料には、医師が彼女の両親へ治療と称して薬を打ち、自害に追い込んだことが記載されていた。

資料を読んだマスマティカは、医師のラボを突き止め、ひとり襲撃を決意する。

アインは、マスマティカの憎悪に気づいていた。彼女が、かつて父親が護身用に持っていたスピリットを持ち出してラボへ向かった時、アインも彼女を止めるためラボへ急いだ。

ラボで薬を弄っていた男は、殺した男の面影があるマスマティカの鬼気迫る表情を見て、彼女が何のために来たのかを悟った。十六年前の亡霊だ。

男と対峙するマスマティカは、後戻りできない感情に揺り動かされていた。彼女はスピリットから銃を復元し、躊躇なく男を撃った。それは男の心臓を捉えていた。

しかし銃弾の軌道は、その場に駆けつけたアインの掌によって逸らされた。パリンという音がして、男の傍にあった薬瓶が割れる。アインは痛みに耐えながら、男へ、マスマティカの抱える想いを吐露した。

アインに命を救われた男は、呆然とそこへ座り込む。マスマティカはアインの掌と引き換えに、正気に戻ったようだった。彼女はアインの側へ走り寄り、座り込み、涙を流した。

「どうして？ 私はあなたを不幸にしたくないのに」

「俺が不幸になることなんてどうだっていい。大事なのは君が不幸にならないことだ」

アインはマスマティカの涙を拭く。

「マスマティカ、この方法では、君が救われない。まっとうな生き方をして幸せになることが両親への供養になると、俺は思うよ」

マスマティカは血の滲むアインの掌に触れて涙し、復讐に生きる人生をやめることを誓った。

「ありがとう、アイン」

彼女は苦しみを抱えた今を抜け出し、新しい自分になるための一步を踏み出した。

アインは彼女が落ち着くまで、穏やかに声をかけ続けていた。



エル・クリスタニアの騒動はオースティアの権力者ネットワークで話題となった。

事件は『アイン・スタンスラインが好奇心から、正義感に溢れる政治家を自殺に追い込んだ閥徒を調査した結果』と解釈され、アインがひとりで行ったことだと人々に認識された。

噂を流したのはアイン自身だ。これは二つのねらいがある。一つはマスマティカを事件から遠ざけ、彼女の築いたネットワークを維持し、政治家となる夢を絶たれぬようにすること。もう一つはオースティアの暴力を支配するマルルト・ストラトスの耳にマスマティカの名前が入らないようにすることだ。

アインは彼女の憎悪がもたらした全ての結果を背負おうとしていた。この行為は、世界の問題解決に関与するという、アインの夢の実現を遠ざけることを、彼も十分理解していた。だが彼は、このリスクを背負うことが、マスマティカを助けたいと誓った自分の責任であり、義務だと考えていた。

この件は、三ヶ月もしないうちにマルルトの耳へ入った。マルルトからの伝令により、アインはエル・クリスタニアアカデミーから除名されることが決まった。学長は退学を言い渡すとき涙を浮かべていた。理由は告げることができないと唇を噛み締めてアインの肩を叩く。

「暴力から遠いところにいる人間ほど、暴力を視界の外に追いやり、直視しない。だから世界に暴力がはびこっても、それを改善できない。暴力を支配するのは、実際に暴力を振るう人間だけだ。もちろん私は暴力を肯定しない。しかし暴力のある世界も肯定しない。私は君を守りたかった。こ

の言葉は本当だ」

学長はこのとき、マルルトへの個人的な反抗を企てていた。アインの前に伏せた手紙。それはエールアカデミーへの編入通知書だった。アインは学長の心意気を感じ取り、エールアカデミーへの編入を決めた。

\*\*\*

ここで物語の視点は、もうひとりの主人公であるケルト・シェイネンに移る。

ウブン1437年四月頭、エールアカデミー五回生となったケルトは人生に絶望していた。

エールはオースティアの八つのアカデミーのうち、偏差値が五番目のアカデミーだ。

学生も勉強へのモチベーションは低く、教授も学生が授業を聞かないことがわかっているから、無駄話だけをして、出席さえすれば単位を出すこともあった。ケルトはそんなアカデミーの現状に苛ついていた。

へお前達がやっているのは、人生の無駄遣いだ。自分自身で生き方を決められない、屑の集まりだ。もちろん俺も」

ケルトは、一つの単位がどうしても取れず、五回目の学生生活を迎えていた。それはエールアカデミーの教授が順繰りで、自分の専門科目を説明するオリエンテーションのような講義だった。

毎週無難なレポートを提出すれば単位が取れるが、ケルトは何人かの教授に対して、彼らの研究姿勢を批判したレポートを提出し、毎年単位を落としていた。

ケルトはこの日、四回落としたこの単位を取るために、また教室にいた。これから教授の代わり映えしない講義が始まる。教授は本当に同じ話をし、質疑応答の時間を取った。

そこで手を上げたのが、アイン・スタンスラインだった。

「教授の皆様にご質問します。私はマルルト・ストラトスを超えたい。この中に、その目的を果たすならば自分の元で学べ、という先生はおられますか？」

教授はドギマギし、何人かが曖昧な回答を返した。この質問はケルトにとって痛快だった。これによって教授は権威の無さを露呈したのだ。

ケルトは講義後、面白い新入生が入ったものと笑みを浮かべた。昼食時にその話を同級生にしていたら、同級生はアインに声をかけようと、ケルトへ強く迫った。だが、ケルトは他の人間に指図されるのが大嫌いだ。彼は同級生の誘いを無視して食堂を出ようとした。

刹那。爆発音がエールアカデミーに轟いた。隣国リベリアの軍隊がアカデミーを襲撃したのだ。教授と学生は突如現れた武装集団になすすべなく、校庭へ連行されていく。

「拉致だ」

地獄への扉が口を広げて待っている。ケルトはエールの有様にツバを吐いた。

へこの国は、十五年前からオースティアと隣国リベリアが戦争状態であることも忘れたか！ 西の学園都市エイリオが、リベリアに奪い取られた悪夢も忘れたか！ 危機が去ればすっかり忘れる、国民も同罪だ。愚者は誰かの陰謀の犠牲になる。当たり前前の帰結だ！

ケルトの言葉は自分自身にも向けられていた。対立が深まるリベリアとオースティア両国の国境。その危険な都市、エールのアカデミーにしか入学できなかった自分の無能さを責めていた。

ここは学歴格差の根強い国、オースティア。偏差値の低いアカデミーなど、隣国への献上物に過ぎないのだ、とケルトは解釈する。

しかしまだ、彼は知らない。エールには、希望が残されていた。

\*\*\*

咄嗟のことだった。アイン・スタンスラインは食堂の隅に隠れて、誰にも見つかっていない。

「激動の人生だね」

思わず声を殺して笑ってしまう。だからだろうか。彼はこの日入学したにすぎないエールアカデミーの学生と教授を、自分の人生の大事な登場人物だと考え、愛おしく感じ始めていた。

「救おう。みんなを」

エル・クリスタニアの学長から託されたエール行きのチケットには、どこか無気力なエールの校風を変えてほしいという学長の想いも含まれている気がした。

アインは頭の中で「無限の枠組み」を反芻し、思考の枠組みを記憶に蘇らせる。アインはエールアカデミーの人々を助けることを目標と定めた。目標が決まれば、あとは現状を把握し、選択肢を創出し、意欲を喚起して行動を導けばいい。冷静に周囲を見てみれば、リベリアに捕らえられた人々は丁重に扱われている。どうやら今回の襲撃は、アカデミー生をリベリアの人的資源とする

目的があるらしい。

「感情に流されず、冷静に現状を捉えたい。ピンチを打開するアイデアを現実的に検討したい」

アインはポケットから四つのスピリットを取り出した。殺傷能力が高いのはマスマティカから奪うようにして引きとった銃だ。ホワイトボードや細剣、松明を復元することもできたが、ホワイトボードを使って議論できる相手じゃない。

リベラリアの軍隊は少なくとも百人。状況を打開するには、リベラリアに捕えられている学生と教授、総勢二千人を動かす必要がある。人々に希望を抱かせ、動かすことが重要だ。たった一つの銃でもそれはできる。

そうこうしているうちにリベラリアの軍人二人がアインを見つけた。アインは復元した銃で二人の足を撃った。パリンという音がして、食堂の窓が割れる。彼は音というレバレッジをかけて反抗勢力を大きく見せた。

「みんな！ 聞いてくれ」

アインは声を振り絞り、校庭の人々へ勇気を与えようと試みた。

「あなたたちはリベラリアの軍隊に負けない力を持っている！ スピリットを持っているみんな、力を貸してくれ。リベラリアの目的は俺たちを怪我なく連れて行くこと。武装は軽微だ。戦おう！」  
しかし期待は絶望に変わる。エールの教授たちが率先してスピリットを捨て去り、抵抗の意志がないことを示したのだ。アインは目を丸くして、苦虫を噛み潰した表情を浮かべる。

「あなたちが動いてくれないと、駄目なんだけどな」

この時動いたのがケルト・シェイネンだ。ケルトは弱気に支配された人々に向けて叫んだ。

「いつまで流される人生を送るつもりだ。今動けない人間に何の価値がある。いい加減気づけ！人生は誰かが決めるものじゃない」

彼は見張りのリベラリア軍人から剣を奪い取ると、自らの足を貫いた。それは動き出さない周囲と自分への憎悪だった。人々はケルトの異常な行動に不快感を抱き、彼に批判されたままにいることを嫌った。

ひとり、またひとりとケルトのまわりでリベラリアへ反抗をしかける人があらわれた。動き出した大衆は、不可逆の雪崩を引き起こしていく。人数で勝るエールの民は、リベラリアの軍人たちを見事退けた。

7

エールアカデミーでリベラリア軍人を退けた学生と教授は、自分たちの成し遂げたことに興奮を覚えていた。アインとケルトという英雄のもと、彼らは自ら行動し、未来を変えた。

『運命を自分の手で切り開いたという実感』

エールの人々はこれまで、上流でも下流でもない人生を流されるようにして生きてきた。彼らは

自分の生きたい人生を生きる経験に乏しかったから、余計に今回の成果を誇りに思っていた。

ところが、エールの司法が彼らに与えたのは罰だった。リベリアの軍人を退ける際に何人かの学生が調子に乗って軍人の命を奪い、遺品を不埒に扱ったためだ。エールの司法は、すでに形骸化しつつある国際法に則って過剰防衛の判決を出し、その先導者であるアイン・スタンスラインを刑務所へ収監することを決めた。この判断にあたっては、隣国を刺激したくない中央政府の意向も加味されている。

アインは、凶行を起こした学生の未来を生け贄とし、自身を救うこともできた。自分が先導したわけではないと抗議すれば、学生の自業自得と片付けることもできたのだ。

しかし彼は自分自身の将来と、学生の未来を天秤に賭けた上で、おとなしくこの判決を受け入れた。なぜなら彼は、リーダーは自分の呼びかけが引き起こした人々の行動に責任を持たなければならないと考えたからだ。アインはともに歩む人をひとり残らず、理想の場所につれていくことを誓っていた。

手縄をかけられ、警察に連行されるアイン。エールの人々はそれを見て、判決を理不尽だと批判した。

人々はエールの司法を支配している中央政府——エル・クリスタニアやクリスタニアのやり方へ怒りを抱き、中央政府へのデモを起こした。学生の間で、中央政府に反発することが格好良い、というムーブメントが発生していた。

そんな中でケルトは、中央政府に歯向えば、エールへの物流制限や資本流入制限が行なわれ、都市が衰弱していくことを予見していた。

「大局を見ず、周囲に流されるだけの馬鹿が溢れかえっている。愚かな大衆どもに支配されたこの町に未来はない。それならばエールを出よう」

ケルトはエールに見切りを付け、近隣の学園都市であるセレスへ向かった。

\*\*\*

アインはエールの東端に位置する刑務所へ収監された。この刑務所は殺人・強盗・強姦といった凶悪犯罪者や、反政府団体の人間を収監している。

刑務所の淀んだ空気は、アインの澄んだ心を否が応でも蝕んでいく。何より彼を傷つけたのは課せられた刑の重さだ。民衆を扇動した罪により、最短五年の禁固。反逆罪を課されれば最長十五年の禁固まであり得た。十六歳の少年にとって、これは果てしなく長い時間に感じられた。

彼の計り知れないところで、人生を地に這いつくばらせそうとする力が働いている。自分の人生には、これから不幸な出来事しか起こらないのではないか……そんな想像も頭をよぎった。

だが彼は絶望との向き合い方を心得ていた。

「俺の人生はいつも、どん底から始まり、成功に至る波形でできてきた」

それに、刑務所に入ることは自分で決めたことだから、と。

アインはこの刑務所内での出会いを楽しみ、将来に役立てることが有益だと開き直って、まわり



の犯罪者へ積極的に話しかけた。彼らは、アインへ実に新しい視点をもたらしてくれた。

酒、異性、ギャンブル、麻薬にまでも溺れた人々。親殺し、武器商人、マフィアのボス。アインが煉瓦造りなどの仕事を通して対話した彼らは、人間の業の深さを強く意識させた。国がこれだけの落第者を出してしまう現実。アインはその現実を、実感をもって課題と捉えた。

そして刑務所で非常識な世界に投げ込まれても、アインは生き様を変えなかった。背筋を伸ばし、洗練された態度で刑務所内の掃除や排泄物の処理を率先して行う。交流に後ろ向きだった囚人たちも、アインの姿を見て心を変えていった。囚人たちも気づいたのだ。刑務所にいることが人間を底辺に貶めるわけじゃない。底辺のように振る舞うことが、自分を貶めていたのだと。

アインも持論を展開し、いずれはオースティアの政治を動かしたいという目標を周囲に語った。若く野心的なアインが、刑務所の淀んだ空気を払拭していく。

あるマフィアのボスが、アインと兄弟の契りを交わしたエピソードがある。ボスはこのようにアインへ問いかけた。

「アイン、お前はここに来るべきではなかったし、実際に来ない選択肢をとることもできた。学生たちを逆にしてやればよかった。お前に守られたという恩すら感じられない人間のせいで、お前の目標達成は遥かに遅れることになった。後悔はしていないのか」

アインは迷いなく言った。

「ボス。俺は後悔などしていいないよ。なぜならここに来ることを、自分で選び取ったからだ。俺は

不運を誰かのせいにして歩みを止めるようなことはしない。昨日より明日、今日より明日と努力を自分に課して、そんなの当たり前じゃないかと言ったのけたい。自分にとって何が大切なのか、何が幸福なのかを知っていれば、他人と比較して遅れただの、早いだのものを考える必要もない。俺はいま、この瞬間を誰よりも楽しんでいる」

ボスはアインのこの発言の眩しさに涙をこぼした。二人は兄弟の契りを交わす。

いつしかアインは囚人のリーダーとなった。人ひとりが足を伸ばして寝る広さもない独房。この小さなスペースに整然とおさまりながら、アインは自分の精神を大きく育てていた。

\*\*\*

刑務所でアインが有名になった頃、オースティアの反政府組織を指揮していた男がアインに接触してきた。男は夢が人を形作ると信じており、アインに将来果たしたい夢を問うた。アインはこう答えた。

「幼い頃、俺は知恵遅れでね。ご飯を綺麗に食べることすら上手くできなかった。そんな俺を、決して馬鹿にせず、認めてくれた人がいたんだ。一番苦しかった時期に、生きる原動力をくれた。俺はその人のようにになりたい。必死で生きようとしている人を、誰もが認める社会を創りたい」

この言葉が男に才能を感じさせたのだろう。

「アイン、君はまだ知名度がない。だが今後、それこそオースティアで最も有名な国士となって、多くの人に支持され、この国の政治を変えていくだろう」

男は予言した。

「私は革新者だ。君のように才能あふれる人間を世の中に先立って評価し、君の価値を人々に伝えることが、私の使命だ。識者は凡人よりも一步早く、価値を理解し伝えなければならない。キャズムを超えてムーブメントを起こすのだ」

男は、専門用語を交えて言った。アインはそれを理解する。

「キャズム。ムーブメントを起こすために必要な、支持率一割六分の壁」

「そうだ。それさえ超えれば、人の波が新たな人の波を呼び寄せる。私はかつて、この壁を超えることができなかった。私の信念はやはり歪んでいるんだ。根本から考え方の違うマイノリティの言葉は、マジョリティには届かない。悲しいがそれが世界の真実だ。けれど君はそうではない。君はマイノリティの経験とマジョリティの精神を持っている。壁を超える力がある。ならば君はここに  
いるべきではない。私が君をここから出そう」

男はアインに希望を授けた。反政府組織時代の右腕を通じて優秀な弁護士を雇い、エールの司法へ起訴し、宣言通りアインの無罪を勝ち取った。正義はいつも多面的だ。金や根回し、当事者の実力によって時々の正義は変わる。

無罪が勝ち取られ、刑務所を出ることが決まった日、長い刑期を覚悟していたアインは、深く頭を下げた。男はアインの肩を叩いて告げた。

「これが大人の戦い方だ。決められたルールの中で、最善の結果を追い求める」

「あなたは、知識を活用する達人だ。曲がった道をまっすぐに歩くことだけが正解に向かっているわけじゃないことを教えてくれた」

男は満足そうに笑う。

「そうだアイン。道はまっすぐに舗装できる。君は舗装された道をまっすぐに歩けばいい。さあ、これからは教えた通り、セレスへ向かうんだ。あそこの学園都市を治めているのは三人の女性だ。女性はえてして安定を好み、変化を受け入れない。けれど女性を味方につければ、世界は変わる。高度な教育を受けられるオースティアの人間が、世界を導くことが出来ることを示してくれ」

男は最後に、国内の主要なマフィアや武器商人の連絡先をアインに持たせた。

「大人は力を持っていなければならない。君ならば巧く使えるだろう」

アインはこのとき、暴力とともに歩むことを決めた。非暴力であることは尊い。だがアインにとって、非暴力はあくまでもその先のゴールへ至るための手段だ。暴力は行使しないこともできる。それは力を持つ人間の品性が決めることだ。アインは暴力を持った。世の中に満ち満ちている暴力に屈することなく、対等な目線で物事を考えるために。

セレスを治める三人の閥徒の一人。二十六歳のソフィアは、自分の母校を憂いた。

「心配性だねえ。何かあったっけ？」

二歳年下のアンナはあっけらかんと言う。

「他の地方のニュースに、トコトン興味を持たないのね」

ソフィアはため息をつく。

「エールアカデミーにリベラリアが攻めてきたのは覚えてるでしょう？ あれ以来、エールと中央

政府が喧嘩していて、独立もあるかもって」

「ええっ、それは大変だ。何が原因でそうなっちゃったの」

「ひとりの男の子が原因らしいの」

ソフィアは手帳を開いた。新聞の切り抜きが貼ってある。

「アイン・スタンスライン。エールの学生を扇動した罪で逮捕だって」

「悪い人もいるものだねえ」

アンナは笑った。ソフィアはそれが違うのよと手を振った。

「エールがいうには、扇動も何も、彼の呼びかけがなかったらエールはリベラリアに侵略されてた。なので中央政府の言いなりになっている司法がおかしいって揉めてる」

セレスも中央政府の決め事に逆らった経験がある。例えば司法と折り合いをつけて、独自のルールを制定している。外国からの留学生を受け入れることも、そのひとつだ。新興の学園都市に人を

集め、財政を健全化するための苦肉の策だった。

「ちょっと興味がでてきたかな。顔がいいし」

アンナはアインの肖像画をみて笑った。

「ふたりとも。ちょっと来てほしい」

ソフィアとアンナに声をかけたのはミネルダだ。この三人がセレスを運営する三人の女性——セレスの三閼徒——で、ミネルダは一番年上だった。

「どうしたの？ ミネルダ姉さま」

アンナの問いかけに、ミネルダは頬を掻いた。

「アカデミーの前に変な旅人がいる」

三人が急いで現場へ駆けつけると、旅人は通行人に『エールの凶行を止める協力をしてほしい』と懇願していた。アンナは大きくあけた口を手でおさえる。

「ソフィア姉さま。アインだよ」

この日からアインは、セレスのオフィスで三人と一緒に過ごすようになった。

「とにかく真っ直ぐ、エールに気持ちを伝えたい」

アインの言葉は、ソフィアの感情をぐっと引き寄せた。

「私もそう思います」

「二人は気が合うねえ」

顎に手を当て小悪魔のように笑うアンナ。ソフィアは「こら」とたしなめ、横目でアインを見た。

「この人、賑やかだね」

「ほんとに。カルブ出身だから」

意地悪な言い方になったかなと、ソフィアの胸がざわつく。アンナと競う気持ちが、芽生えていた。

「でも、エールへの気持ちは負けないんだから」

ソフィアは、アインと密に対話しながら、エールの民を説得するシナリオを作成していった。

\*\*\*

ケルト・シェイネンがセレスを訪れたのは、アインがちょうどセレスの三閥徒と交友を深めていたところだ。ケルトはセレスのモーターに泊まり、日々の生活費を稼ぎながら燻っていた。

そんな彼の耳に、セレスの閥徒が若い男をアドバイザーとして雇用し、エールの凶行を止めるための活動に協力させている、という噂が飛び込んだ。

「間違いない。この男はアインだ」

直感が告げていた。

ケルトがセレスの閥徒を訪ねると、そこにアインはいた。運命に導かれるようにして、二人は再び出会った。

「一度目の説得が失敗したので、再度提案を練りなおしているんです」

穏やかな声で、明瞭な言葉を述べたのは一度目の説得を担ったソフィアだ。彼女はエールアカデミーを主席で卒業し、振興都市の立ち上げに伴ってセレスへ移住した経歴を持つ。だからエールの教授とも面識があり、話を進めやすかった。

「何がだめだったのかしら」

ソフィアは一度目の説得で、エールに反抗をやめるよう説得した。もうアインは弁護士力で無罪を勝ち取り、罪を逃れたのだから、中央政府と戦う理由は無くなったのではないかと。

しかしエールの民は、一度アインを罰した事実——隣国からの侵略に対して声をあげた人々を法によって縛り付けるという中央政府のやり方——が不満なのだと訴え、反抗を止めようとしなかった。そうして議論が平行線をたどっている。

二度目の説得を検討する中でアインが重視したのは、エールの民の感情を尊重することだった。「俺の意見をエールに押し付けすぎたね。もっとソフィアの話聞けばよかった」

アインはソフィアに頭を下げた。

「そんなことない。私も、正論ばかりだったわ」

ソフィアは肩を縮めた。アインは穏やかに、百八十度転換した方針を伝える。

「正論でエールを説得するのではなくて、色々な選択肢を考えて、彼らにやりたいことを選んでもらったら、変わるかもしれない」



アインは、極端な例も交えてアイデアを述べた。オースティアから独立して新たな国をつくるとか——降伏してリベリアの領土になるとか——エール単体でリベリアと戦争をして勝ち、首都へ凱旋するとか——様々な手段で、中央政府からの援助無しでも都市が成り立つようなビジネスを立ち上げて成功させるとか——様々な手段で、中央政府からの自立を表現するアイデアを勧めたいといった。

「エールの感情が動くアイデアを提案できたら、議論は前に進むんじゃないかな。俺は、彼らがどのような便益を得られるかを大事にしてみたい。どうか」

ソフィアを傷つけず、アインは真逆の方針を変えた。ケルトは、この聡明な男に嫉妬を抱いた。

「エールは愚かだ。やつらの願望などへし折って、屈服させればよい」

ケルトは柔軟さを失っていた。

「エールの人々にやりたいことを選ばせたら、それは必ず間違っている」

ケルトはこの検討中、アインの全てを否定した。

だが、アインはそんなケルトの意見を大事にし、セレスの三閥徒も含めた五人でよく食事を開いて話を引き出した。一週間で新たな提案は完成し、ソフィアができあがったアイデアをエールへ持っていく、民の前でプレゼンテーションした。

エールの民は、セレスの人々が自分達の立場に立ってアイデアを検討してくれたことへ感謝し、『エール単体でリベリアと戦争をして勝ち、首都へ凱旋する』案を採択した。

二度目の提案を終えたメンバーは、セレスで作戦会議を行う。先陣を切ったのはケルトだ。

「見たことか。エールの人間はオースティアが好きだからこの土地を離れたくなく、ビジネスを成功させる自信も無い。それでも中央政府からの自立を示す、最も安易な道を選んだだけだ」

ケルトの指摘にソフィアも耳を傾けた。暴力によって自立を表現する道は、ソフィアの望むものではないからだ。しかしアインはエールの民の選択を尊重した。

「人が本当に望むことって、身勝手に見えるんじゃないかな」

三度目の提案にはアインも参加し、エールの民へ戦争のアイデアと勝算を伝えた。

「エール単体で戦争を起こすとなれば、兵士も武装も十分な数を用意できるはずがない……リベリアもそのように認識するでしょう。経験による思い込みです。それを逆手に取り、潤沢な兵力と武装を整えて戦争に向かえば、必ず相手を退けられます。兵力の増強に関しては、セレスも力を貸す準備が、ありますよね」

アインの質問に、ソフィアは躊躇いがちに頷いた。この青年は暴力に目を背ける男ではない。それが少し怖かった。アインは続ける。

「十分な戦力があると認識されないよう、兵を分散し、途中で合流するなどの策を講じましょう。武装については、私の方でも、あたってみます」

アインは刑務所で紹介された武器商人へ連絡し、武装の購入を進めた。商人は中央政府を主な顧客としたために、今の情勢ではエールと敵対する立場だったが、武器が売れば利益になるからと

武器を売った。

「この人は、白馬の王子様なんかじゃない」

ソフィアはアインへの慕情が急激に冷めていくことを感じた。

「平穏な日常を望んでないもの」

アインとセレスの働きかけにより、エールは十分な兵力と武装を整えたうえでリベラリアの軍と対峙することができた。リベラリア軍との戦争は、オースティアとリベラリアの国境であるエイロで行われた。十五年前、リベラリアに奪われた因縁の地だ。オースティアの一地方都市であるエールの起こした戦争。簡単な戦い、とリベラリアの指揮官は考えたのだろう。戦の節々に驕りが見えた。アインはこの時期、戦争の本質を何も理解していなかったが、奇跡の起こし方は知っていた。「十分な準備をして、その時を待つ。そうすれば——」

これは総じて、巧みな戦闘ではなかった。兵の総数こそ相手を上回っていたが、戦力を小分けにして逐次投入するという愚かな戦術が採用されたし、死力を尽くして戦えば戦況は変わるという希望的観測によって、無謀な突撃が行われ、多くの兵が犠牲になった。

それでも彼らは糸を手繰り寄せた。エールは多くの死者を出しながらも、戦いに勝利した。素人がプロの軍人に一矢報いた、後に奇跡の日と呼ばれる勝利だ。

エールの人々が最初に抱いたのは達成感。次に抱いたのは、暴力の輪廻に足を踏み入れてしまったかもしれないという漠然とした不安だった。

「アイン。これで終わったらだめだと思おうの」

ソフィアは毅然とした態度で、アインに向かった。ともにエールのことを想う政治家の顔だ。

「もちろんさ」

アインは短く言い切った。

エールの人々が勝利の美酒に酔いしれているうちに、アイン達は首都クリスタニアへの凱旋を中央政府に申し入れた。

9

オースティアは王制を採用していた。国王は世襲制で、国王と正室、側室の間に生まれた王家の男児から適任者が代々選ばれてきた。

国民は、国王が政治を行っていると信じている。だが実際は、派閥が国王を操り、国を動かしている。マルルト・ストラトスの率いる派閥ストラトス。この派閥は、ランドルフ派とサンドレックス派を含めたオースティアの三大派閥のうちで、最大の勢力を誇り、政治の実権を握っていた。

「国王は常識的な判断が出来ないお方だ」

マルルトは近年、周囲にこう漏らす。しかし原因はマルルト自身にある。先代の王が病に倒れた後、幼い現国王の教育係となったマルルトはまともな教育を与えなかった。

「これでは我らの献身が報われない」

国王を世間と隔絶し、常識的な感性を失わせた張本人——マルルトはいけしゃあしゃあという。

国王は今年三十五歳。頬は痩せこけ、泥色の顔に白髪が目立ち、実年齢より遥かに年老いて見えた。  
〈飽いたな〉

マルルトは、エールが首都凱旋を申し出ていると聞き、ある計画を思いついた。彼はそのアイデアを誰かに伝えたくて仕方がなく、最も信頼している閼徒ヴォルター・K・グインにこう話した。

「エールがリベリアとの戦争に勝利したそうだ。クリスタニアに楯突く新興都市、セレスも協力したようだ。彼らは凱旋を要求している。私はこれを許可したい」

クククとマルルトは笑った。

「グインよ。エールの人間は中央政府にいじめられてきた。凱旋式の中で、怒りに任せて国王を殺してしまうことも、あるよなあ」

エル・クリスタニア出身の青年閼徒ヴォルター・K・グインは、瞳に鋭さを失わない。

「なるほど。そうなればマルルト卿が王座に座することも」

彼はマルルトのやり方を批判的に見ながらも、彼に迎合している。

「その通りだ。グイン、これからは君にも働いてもらうよ。凱旋式が楽しみだ」

\*\*\*

マルルトの企てを知る由もなく、アイン達は凱旋式のため、首都クリスタニアへ上京した。国王

からの勲章授与が予定に組まれており、それを誰が受け取るかが話題になった。ソフィアはアインを推薦し、エールの民もそれに納得して、アインが大役を引き受けることとなった。

「アイン、お願いね」

ソフィアの言葉に、アインは気を引き締める。

「もちろん。この役は名誉じゃない。使命と抱き合わせだ」

使命とは、エールの抜いた矛を収めること。

「中央政府からの謝罪をとりつけ、それをもってエールの駐留軍を撤退させる」

アインの落とし所はそこだった。

凱旋式は仰々しい雰囲気醸し出していた。首都クリスタニアの軍隊が周りを囲い、その内側にクリスタニアやエル・クリスタニアの閥徒が勢揃いしている。会場にはひな壇が用意され、頂上に国王が座っていた。アインは会話のプランを練りながらひな壇に登る。コツコツと、乾いた音だけが周囲に響いた。

だがアインの思慮は無駄に終わる。国王が目を合わせることもなく、話を終わらせたからだ。

「リベラリアとの戦争ご苦労だった」

国王は、勲章を投げるように渡す。誰もが、アインからの挨拶があるべきだと感じた。勲章を受領するために、わざわざ凱旋を求めたわけではない。

アインはつい、正直に聞いた。

「国王。失礼ですがあなたは、エールの国民が、中央政府から自立するために起こした戦争の意味を、理解していच्छいますか？」

王は目を泳がせた。聡明さも、奥ゆかしさも、人を欺く狡猾さもこの国王からは感じられない。「戦争に勝ち、君たちは賞された。それでいいだろう」

アインは理解した。この人は、自分の意志で王の重責を担っているわけではない。周囲から王へ仕立てられた――。

〈機械人形じゃないか〉

だとすれば、国王の心の窓を開くところから始めなければ、エールの抜いた矛は収められない。「本音で話をさせてください」

アインは襟を正した。本音で話して初めて、お互いの悪いところが見えてくる。そして悪いところを修正したり受け入れたりすることでしか、関係は発展しない。だから伝える。

「あなたはまるで、誰かに自尊心を傷つけられた少年のようです。オースティアの理想を体现すべき王の姿では、到底ない」

「やめろ！」

国王は耳を塞いだ。

「何度もやろうとした！ けれども周りは、わしに何もまともなことを教えてくれなかった！ わしは政治に興味が無い。このまま無難に時が過ぎればそれでいい！」

この大きな子どもは、ただ己の保身だけを考え、自分の殻に閉じこもっていた。しかしアインは王の苦しみが理解できた。国王の周りには、きっと安心が存在しないのだ。

アインは母親にまで否定された子供時代、そして弟の顔を、思い出していた。

「国王。臆病な遠慮は、人間関係をいつか壊します。私はつらい想いを共有したい。話をしましう。あなたの良い部分も、悪い部分もさらけだして。同じように、私達のことも——」

アインが言いかけたその時、群衆の中から国王に向けてボウガンの矢が放たれた。いち早く気づいたアインは自らの掌を犠牲にして、矢をはじく。それから所持していたスピリットを携え、矢の射出者を探した。左手からは血が滴っている。

「国王、逃げてください。この凱旋は、あなたを殺すためのカモフラージュです」

しかし王はなすがまま、流されることを選んだ。

「もういい、わしは疲れた。痛くなければ、それでいい」

血を滴らせて自分を守った少年に対し、王は痛くなければ死んでもいいと言った。

「何を言ってるんだ！」

アインは叫んだ。彼は、弟が命をかけて自分を救ってくれたことを覚えている。それ以来弟の分も生きようと、どんな苦しみにも立ち向かい、前向きに生きてきた。

「俺がオースティアに来たのは、政治家になってあんたを助けたいと思ったからだ！」

アインは国王にもそうあってほしかった。オースティアの権力の頂点。王が前向きに問題に立ち



向かえば、アインの夢である世界の問題解決は、実現するのだ。

「馬鹿じゃないか」

しかしアインの魂からこぼれた言葉は、奥に込められた本心を別として、国王に伝わってしまう。  
「馬鹿だと!？」

その一言しか理解ができなかったのか。国王は激昂しアインをひな壇に押し倒した。馬乗りになって腰から剣を抜き、剣を喉元へ突きつける。アインの計画は破綻した。ソフィアもアンナも目を覆う。王は子供のように顔を赤くして、肩を震わせている。だが国王は、剣を突き降ろさなかった。  
「だったら」

震える手から、剣がこぼれ落ちた。

「お前がやってみろ。この苦しみの中、聡明で居続けてみろ」  
剣の落ちる音が、あたりに残響した。

10

〈何といった〉

マルルトは苦虫を噛み潰した表情で、国王を睨んだ。

〈王をやってみろだ？ 社交部の部長じゃないのだぞ、いや、それですらもっと分別があらう〉

王子の誕生を妨害し、国民に王位継承者の心配をさせている張本人はマルルトだ。いずれはストラトスの家系を王族に連れ、自らが王になるという野心もある。だが彼もこんな展開は望んでいないし、予想していなかった。

〈明日には取り消したくなるだろうに〉

国王は、自分の発言がどのような結果をもたらすかを想像できない子どもだ。マルルトは国王の軽率さを憐れんだ。だが一度口にした言葉には力がある。マルルトはこの状況を利用できないかと思いを巡らせた。

〈そうだ。世襲制というルールを崩せば、その後がやりやすくなる。思えばここで王を殺害し、私が国王になれば、王殺しの疑いが私にかかるかもしれない〉

凱旋式の会場は喧噪に包まれている。その喧噪を治めたのはロンドゥール・モンペリオ。エル・クリスタニアの社交パーティーでアインの才能を最初に見いだした男だった。先手を打たれたマルルトは、眉間に皺を寄せて歯ぎしりをしたが、すぐにロンドゥールへ賛同を表明し、ボウガンを出した男を見つけ出して、釈明もさせず首を落とした。無論、彼に王を撃つよう命じたのはマルルトだ。

〈事実は闇のなかに〉

マルルト・ストラトスは新しい王へ向かって深々と礼をする。

「今後とも宜しくお願い致します。新国王」

だがこの日、マルルトは消息を絶つ。

\*\*\*

マルルトは国王を操り、国家の品位を脅かす愚かしい国策を講じさせることで、国王を国民からの批判に晒してきた。

北風と太陽の物語では、北風が諦めたために、太陽が旅人の服を脱がすチャンスを得た。しかし北風が永遠に諦めなければ、やがて旅人は凍てついて命を落としただろう。服はその後、死体からでも剥がせる。マルルトの狙いも同じだ。彼には国王が自ら玉座を降りるまで、国王を苦しめ続けるという強い意志がある。

しかしマルルトのやり方は、国家の信頼を過剰に貶めてもいた。

マルルトを暗殺したのは、オースティアという国に希望を持ち、国家の尊厳・誇りを保ち続けたと考える政治家。つまりヴォルター・K・グインを筆頭にまとまったストラトス派の閥徒たちだ。「マルルト卿。あなたはしつこすぎた」

グインはタバコをふかし、鎮魂の言葉を告げる。マルルトを失った政界には激震が走ったが、その混乱を鎮めたのも彼らだった。

「これからは俺が指揮を執る。皆、新しい国王へ『自然と』接するように」

グインはアインが国会に入るまでに、すべての仕事を終わらせた。わずか一日で、グインは政界の主導権を完全に掌握した。

\*\*\*

オースティアの国王となった少年——アイン・スタンスライン。

彼の見る世界は一変した。共に働く閥徒達は、アカデミーを主席で卒業するような一角の人物ばかりだ。彼らは才知に長け、努力もしている。穏やかな物腰の裏に野心も持ち、その視線には、アインへ対する敵対心と懐疑心が満ち満ちていた。

エル・クリスタニアアカデミーの社交部員として社交会に参加していた頃、アインは閥徒に憧れる学生だった。しかし今は、閥徒を従える王となった。アインに閥徒を従える自覚がなくとも、周囲はそうように見る。

「求められるのは圧倒的な成果だ」

どんなに才能のある者も、最初は誰からも信用されない。成果を積み上げることだけが、人の信用を高め、自分自身を守ることにつながる。

アインには、ひとつの信用もなかった。国王の職務を一度でも失敗すれば、周囲から糾弾される。糾弾を回避するためには国王のスケジュール、業務内容や業務の目的を理解して、細部まで配慮を行き届かせねばならない。

〈身を守ってくれるのは情報だ〉

アインは、周囲に説明を求めた。

しかし閥徒達は、背景の説明をすっ飛ばして、決定事項だけを告げる。

「国王。就任後の所信表明が必要です。すでに会場の手配と案内は済んでおり、表明する内容については国王におまかせします」

所信表明はわずか十日後、ウブン1437年八月二十五日のことだった。

\*\*\*

「何をどうすれば、圧倒的な演説がつけれる？」

アインは国会図書館で頭を抱えた。

十日しかないという期限の短さと、難易度の高さが彼の頭を混乱させた。

〈疾風怒濤〉

突然国王に指名され、最大派閥ストラトスの党首マルルトを失い、閥徒をまとめるのは自分だという責任感が芽生えた。無様な所信表明をして求心力を失えば、国が傾くという不安がある。

「どうする？ 何をいえば響く」

アインは自分に緊張を強いた。心の奥に、自惚れの感情が生まれ始めていたからだ。

まだわずか十七歳の少年。世界の問題解決に関与したいからと権力を求め、都合よく権力が転がり込んできた。独自の言葉で周囲を感心させたい、尊敬されたい、支持されたい欲もある。

「違う、まやかした」

彼は無邪気な欲望が、人を殺すことを知っている。欲は致命的な失敗をつれてくる。

「個人の欲望を捨て去れ。主張を消せ」

アインは約三百年の長きにわたって二十代続く、血の伝統にすぎた。建国者であるアルファ・オースティアから、前国王まで。歴代国王の所信表明を読みながら、政治の存在意義や、目指したい国の姿を考えた。

「歴史とひとつになるんだ」

オースティアの建国者アルファ・オースティアは、なぜこの国をつくったのか。建国と同時に築かれた八つの学園都市は、人々に何を授けてきたのか。なぜ試験の点数が人生を決める世界をつくったのか。堆積した歴史から、本質を掬いあげるしかない。

「試験の点数とは何だ。オースティアが存在する価値とは、何なんだ」

食べ物も喉を通らず、五日間眠ることもできなかった。極限状態のなかで、アインは朦朧としたまま初代国王の所信表明を読んだ。

『血筋じゃない、生き様だ』

会ったこともない初代国王の声が聞こえた。アインは涙がこぼれた。

「俺は！ オースティアを！」

\*\*\*

当日、白い正装に身を包んだアインは、凜とした表情で国会のひな壇に登った。閣僚たちは目をパチクリさせる。一七歳の少年が、まるで何かに憑かれたように堂々と立っていたからだ。

「オースティアの第二十一代国王、アイン・スタンスラインです」

国王は若々しく、精一杯、舞った。

『私はオースティアを、誰もが行きたい道を、行ける国にしたい。人々が互いに認め合える国にしたい。オースティアに、希望を』

と結ばれた所信表明。ある青年閥徒は、これを珠玉の言葉と捉えた。言葉の抑揚、振る舞い、話し方、全てが高い水準で維持されており、内容をスッと胸にとけ込ませる。

「ひとりで、よくここまで内容を洗練できたものだ。しかもあんな若者が」

何人かは唖った。この演説の後、何人かの閥徒はアインに興味を持ち、接触を図った。

しかしヴォルター・K・グインの介入が入ると、蜘蛛の子を散らすように人が消えた。アインには見えていないが、グインが今の政界を動かしている。彼の意図に反する行動を取れば、政界での立ち位置が危うくなる。閥徒達は無知を装い、業務のノウハウをアインに教えなかった。酒を飲むときは、アインを誘わず閥徒だけで行った。アインは政界という混沌の中で、次第に孤立していく。「もがきながら、覚えるしかない」

彼は細部まで配慮して、国王として完璧な仕事を続けた。しかしオースティアの広報を掌握したグインの情報操作により、その仕事ぶりは世間に公表されなかった。つまり世間的に見れば、国王に就任してからの実績はゼロのまま。信用は何一つ積み上がっておらず、仕事をこなさなければ糾弾される状況は変わっていない。そしてアインは、致命的といえる過ちを犯した。

リベラリア領エイリオのエール軍が全滅したのだ。

その原因は、アインの出した退却命令を閣徒が意図的に破棄したことにある。アインは国王就任当初からエール軍を気にかけて、退却命令をだしていた。

「届いたことを確認しなかった自分の責任だ」

アインは夜空を見上げた。

\*\*\*

漆黒の空。コウモリが舞う。

「時機到来か」

ヴォルター・K・グインはアインの失態を待っていた。彼はこのタイミングで、アインについて三つの批判を行うべく、準備をしていた。それは現在、過去、記憶の批判だった。

「人は三つの次元でできている。ひとつは現在。ふたつは過去。そして過去と現在をつなぐ記憶」  
グインは『時間軸を伴った記憶』こそが人だと考える。過去の実績を誇る人間もいれば、現在を誇る人間もいる。学生時代の記憶から一步もでない大人もいる。

「アインがどこに重きをおくかはわからないが、三つを同時に叩けば問題ない」

現在批判では、アインに国王として充分な実力がないことを批判した。つまり閣徒を掌握できていないこと、仕事の仕方を知らないこと。そしてアインが退却命令をださなかったためにエール軍を失ったことが問責された。アインが反論しても、政府内では誰も彼の言葉に耳を傾けない。

過去批判ではエールという三流アカデミー出身であること、刑務所に収監されたこと、過去知恵



遅れだったことを批判した。

記憶批判では、ノスタルジア村から連れてきた親友にアインを批判させ、アインの思い出を踏みにじった。アインの親友である二人の少年——エイサムとロングマンは家族を人質に取られ、弱りきったアインに冷たい罵声を浴びせることしか許されなかった。

オースティアの市民も、無情なものだ。

「新しい国王は頼りないね」

「国民を見捨てるなんて、許せない」

人々は国政への不満を、アインへの不満に転嫁した。『オースティアに、希望を』と謳った十七歳の青年は、今や一般の人々の絶望の原因となっていた。新聞には、知恵遅れ、刑務所、三流アカデミーのエール出身者など、ネガティブでセンセーショナルなタイトルの記事が掲載された。この国は、一度失敗した人間に、敗者のステイグマを刻もうとする。

アインは、自分が大切にしてきた思い出すら嘘のように感じた。

今の彼には、助けてくれる閥徒も、声をかけてくれる仲間もない。国務のミスがミスと呼び、糾弾の連鎖が始まっていく。

世界がアインの敵となった。

アインは焦点を失った空虚なまなざしで、部屋の隅を見ていた。足元には新聞が落ちていた。

「……ねよ、俺」

泣きたくなる衝動をこらえる。

「死ねよ」

倦怠感で時間が経つのも忘れた。そんなとき、ヴォルター・K・グインがアインを食事に誘った。待ち合わせ場所はクリスタニアのレストランだ。

「本当に苦しければ、逃げてもいいのだ」

グインの手には小さな薬瓶。「飲めば楽になる」といってそれを手渡され、部屋に戻ると、アインは薬瓶をしげしげと眺めた。

「いっそ飲んでしまおうか」

中身は想像できる。飲めば取り返しがつかないこともわかった。

蓋をあけるとボンと音がして、紫の煙がわずかに舞い、煙の後ろに影ができた。

「早まるな、バカ息子」

アインは目を丸くした。部屋の隅に、エルゴルの故郷から追放された父、ルビノ・スタンスラインが立っている。

「どうして」

「三日ほど休みを取れ」

父親はアインを強引に立たせた。

「ティルテュからの伝言だ」

母親のかけた魔法のように思えた。

ルビノはアインを外に連れ出すと、馬車を走らせ、息子をエールとリベラリアの戦争の舞台エイリオへつれていった。たどり着いたのは、エイリオの仮面喫茶。

「俺たちはここで出会った。身分も立場もここでは関係ない」

父親は入り口で息子にタキシードと仮面を身に着けさせ、手紙を渡して喫茶へ送り出した。

「反省しろ。その手紙と一緒に」

結論からいえば、父親の企てはうまくいかなかった。アインは手紙を読んでいない。しかし、この仮面喫茶で、アインは運命的な出会いを果たした。それはリベラリアの天才ライロック・マディンとの出会いだ。

ライロックは若干十三歳でリベラリアの軍部大使となり、三十年続いたリベラリアの内紛を治めた男だ。それから十五年。彼もまた悩み、仮面喫茶に救いを求めている。

ライロックの悩みは、いま目にかけているリベラリア次期提督候補、リノアン・デュランのことだ。彼がエルゴルとの外交で忙しく働いている間に、リノアンの教育係が暗黒魔法の使い手である

ベアトリスに決まってしまった。ライロックはこれまでリノアンの側で彼女を指導し、その聡明さと純真さを尊いと感じていた。しかしベアトリスの教育によって、リノアンの純真さが失われてしまわないか、それを彼は懸念していた。次にリノアンに会えるのは二ヶ月後だ。

アインとライロック。

後に世界を担う二人の男は、この仮面喫茶で初めて出会った。

聞き手となったのはライロックだった。

「俺は！……どうすればいいか、わかりません」

アインの悲痛な叫び。周囲の閥徒と過去の友人から批判され、孤独感を感じていた彼。ようやく自分の話を聞いてくれる他人に出会い、それだけでも幾分救われた。アインは、自分が王ということとは明言せず、現在の境遇をライロックへ話した。ライロックはアインの置かれた立場を理解し、彼の取るべき道をランチェスターの法則に例えて伝えた。

「君を取り巻く人々は、誰かを頂点として組織的に君を追い込んでいる。君は、弱者だ」

アインはゆっくりと首を振った。自分が弱いことはわかっている。しかしそれは自分の責任で、まわりの責任ではないと思った。

「全員が、悪になれますか？ 一糸乱れず、誰かを追い込むなんて」

「それは、自分よりも優秀な人間を想像できていないから、ではないかな」

ライロックは微笑む。アインは息を呑んだ。自分の想像力を欠如させていたのは、自分自身のプライドだと気づいたからだ。

「ならば」

ライロックはグラスを傾けた。

「弱者である君は、強者と同じように戦ってはいけない。彼我の力差を正しくつかみ、それに応じた戦いをするのが大事だ。弱者の戦略は、差別化戦略を基本として五つある」

ライロックは五つの戦略を説いた。

これまでやらなかった発想で新しい戦いの場を設ける局地戦。自分の顧客となる人々との関係づくりを重視する接近戦。強みを活かし、それに特化して勝利を目指す一点集中。一騎打ちに持ち込めるような場で戦いを挑むこと。徹底して敵戦力を分断する陽動戦。

「失うことを、怖がってはいけないよ」

アインは、グラスの一点を見つめている。

「ありがとうございます」

心のつかえがとれていた。

「いま、一つの冴えたアイデアが浮かびました」

顔をあげた。アインの頭にはすでに、課題に対する対処策が、ありありと描かれている。

ライロックはふっと笑う。

「私は、君のような聡明な青年が、大人や社会によって潰されるところを見たくない。それが仮面喫茶で出会った、二度と出会う機会のない青年であっても」

「出会うことは、できますよ」

アインはライロックの仮面からわずかに覗く瞳を見据えて言った。

「だって俺はオースティアの国王だから」

「聞かなかったことにしよう」

アインは深い礼をして去り、ライロックはバーボンを飲み干した。

## 挿絵ページ

※試し読みでは表示されません。

ライロツクとの出会いは、アイン・スタンスラインを復活させた。

「過去から現在にかけての事実も記憶も、自分の一部だ。その延長線上に未来があるなら、どんなに批判されたって、肯定したい」

ポジティブな想いが蘇った。敵がいて、自分を貶めている、という対立構造が見えると、苦しみを客観的に分析できた。

「いまの俺が間違いか。答えは出てない」

アインはオースティアの首都クリスタニアへと帰還する。アインは仮面喫茶で読まなかった父親の手紙を、クリスタニアに帰ってから読んだ。手紙は、アインの決断を後押しした。

「この言葉を待ってた。ありがとう、父さん」

\*\*\*

首都についたアインは翌日、クリスタニアの全閥徒を講堂へ集めた。ヴォルター・K・グインもそこにいた。

〈戻らないと思ったが、随分元氣そうじゃないか〉

グインの目は好奇心に満ちている。アインは笑みを失わない。

「一ヶ月間、悩み苦しみました」



目を閉じると、永遠にも思われた記憶が蘇る。かけられた言葉は氷のように冷たく、アインは傷つき、倒れそうになった。

「それでも私は信じています。所信表明の日、私を穏やかに見守ってくださいました皆さんを、信じています。統率力のある閥徒が、指示をした。皆さんはそれにやむなく従った」

アインは、マルルトのようだった。権力者がいなくなっても、代わりはでてくるもの。

「それだけのこと。マルルトもそうだった。力を持ちながら、裏から国を操るしかできなかった。それがこの国の問題です。彼らのような実力者が、王なる国であるべきだ！」

閥徒達は息を呑んだ。アインは自分を苦しめた閥徒に、王になれるというのだ。アインは白い礼服の胸ポケットから小瓶を取り出した。

「ある閥徒から手渡されたトリカブトです。こんな世界は正しくない。前の王が死ななければ、次の王へ変わらないという古い仕組みは、私の代で断ち切る」

何人かの閥徒が声を荒げた。

「ならばどうするつもりだ！」

これはアインに対する期待の裏返しでもあった。

「私は提案します」

——国民選挙をしましょう。

「国民全員の投票によって、王を決めるのです」

アインはチョークを手に取り、国会の壁に立候補者の四か条を書く。

『任期四年。連続当選二回迄。連続当選できなかった国王は政治を辞する。派閥でなく国を想う』  
勢いよくチョークを置いた。

「誰のもとで選挙を戦うかは自由です。ですが、たとえヴォルター・K・グインであっても、私の支持者には手を出させない。閥徒も王を——」

選べ。

アインの宣言は、政界に波紋をもたらした。最初は損得で、現国王に取り入るほうが有利だとか、スパイとして情報売れば儲かるだとかを議論していたが、帰結したのはシンプルな結論だ。

「国の将来を議論しないか？」

若い閥徒達はアインを支持し、ヴォルター・K・グインと袂を分かった。

「きてくれて、ありがとう」

アインは支持者とともに選挙準備を進める。

「そういえば」

支持者のひとりが眉をひそめて聞いた。

「政治家を辞めるのは、『選挙で選ばれた国王』だけですよね」

アインは質問の本意を探った。立候補者の四か条に関する質問だろうけれど

「そうだね。そうだった」

自然と顔がほころぶ。『選挙で選ばれた国王』にしなければ、現国王のアインも含まれてしまう。閹徒はそれを嫌ったのだ。

「明日、決まりに文面を追記しよう」

国王になってはじめてかもしれない。純粋な好意を感じたのは。

ウブン1437年十月。国民選挙が始まった。アインは自分がこれまで出会い、言葉を交わしてきた人々の力を頼り、この選挙を戦うことを決めていた。

エル・クリスタニアアカデミーの学長や社交部員、なかでも部長のユミル・ド・コノルーや、新聞会社を立ち上げた男、イベントサークルを立ち上げた女。バーで働いていた時に出会ったエル・クリスタニアの多くの人々。エルアカデミーの人々や、刑務所で出会った反政府組織のリーダー、彼に紹介された国内の主要なマフィアや武器商人。アインが前国王から「だったらお前がやってみろ」と宣言された凱旋式で、喧噪を治めてくれたロンドウール・モンペリオ。セレスの三閹徒は自分の卒業したアカデミーに掛け合って、ソフィアはエールに、アンナはカルブ、ミネルダはエイモストの地域ネットワークへ、アインを紹介してくれた。

アインはこれまで、誰かのために自分を犠牲にすることを、誇ってすらいた。

『自分は誰よりも優秀だ』

だから他人を助けることが自分の役割であり、自分にはその能力がある。

「でも、違ったね」

父親からの手紙を丁寧ひらく。

『一人でできることなんてたかが知れている。人の力をあてにしている。お前の才能は、誰からも好かれる人柄だ。声をかけろ。みんな待っている』

アインはこのとき、誰かのためではなく自分のために、全面的に周囲を頼った。それは彼に、人と人の繋がりがもたらすエネルギーを体感させることとなる。

エル・クリスタニアで新聞会社を立ち上げた男は『国王に対する批判が妥当なものか』という特集記事を出し、これが百万部売れた。エールにいたのも、刑務所に捕まったのも、誰かを思いやったことだったと、その記事は書いていた。

ロンドゥールとユミルは公開対談を開催し、アインという人物の人柄や能力について、第三者目線で見解を述べた。多くは賛辞と賞賛の言葉だ。ソフィア、アンナ、ミネルダはアインと共に国内を回り、国民と交流を深めた。

世襲君主制から、選挙君主制への移行。巨大な構造の変化が人々を襲い、混乱が街を包む。だが、ここは学問の国オースティア。人々は、新しい価値観を学び、身につけるだけの智慧があった。

そして約六百万枚の投票用紙が、投票ボックスに投函されていく。アインもそれを見守った。

「新しい国王は頼りになる」

「国民のことを、頼むぞ」

誰もがアインにあたたかい言葉をかけた。

結果の集計が終わる。ロビン・J・ランドルフが653、542票、プラテナ・サンドレックスが895、680票、ヴォルター・K・グインが2、180、917票、アイン・スタンズラインが――2、180、206票。わずかに届かなかった。

「でも、清々しい」

開票の場で、アインは爽やかに笑った。

勝利に沸くグインの陣営。人々の熱狂と裏腹に、グインの頭は冴えきっていた。

「時代とともに組織は変革されなければならない」

煙草をおとして踏みつぶす。

閥徒が傀儡の王を操るといふ、オースティアの問題構造。この構造を根本から破壊したのは、国を良くしたいという、青年の純粋な願いだ。

「誰もできないことをやった」

グインは好敵手を遠目に見た。

「アイン、お前は稀代の変革者だ！」

13

国民全員の投票によって、王を決める――。オースティア国民の柔軟性と、アインの権力にしがみつかない姿勢があったからこそ、この仕組みは実現できた。

選挙で国民に選ばれ、王となったグインは、戴冠式でアインから王冠を被せられた。アインもグインも死力を尽くしてフェアに戦った。結果としてグインが王になったのだから、そこに一片のわだかまりも無い。

グインは国王の書斎で煙草をふかせていた。アインが王の頃、この部屋に灰皿は置かれていなかった。人も街も国も何もかも変わっていく。

書斎のドアがノックされた。グインは入るよう言うと、そこに立っていた男を見て少し驚いたが、すぐにいつもの不敵な笑みを浮かべて言った。

「フェアな勝負だった」

グインはアインに穏やかな声をかけた。

「君は私が見た中で最高の政治家だ。マルルト・ストラトスなど目ではない」

グインの台詞に、アインは言葉を詰まらせた。

「これからどうする？」

グインはアインを秘書に迎え入れたいと強く願っていた。しかしアインは世界を見て、見聞を深めたいと言った。

「それであれば仕方ない。世界を見ることは良いことだ。オースティアだけでなく、世界の繁栄を願えるような人物となって、帰ってきてくれることを望もう。

新国王はアインへ、自分がかつてついていた閥徒のバッジを渡した。

「お前はこの十数年、自分の中の理想だけを追いかけ、反復推敲を繰り返してきた。その結果が今のお前の生き様なのだとすれば、稀に見る蓋世之材だ。しかしお前が今以上の成長を望むならば、お前の理想を越えた師を持つべきだ。マタリカの旅でその師と出会えば良いな」

アインは、グインこそがその師となりうる人物だと感じていた。

オースティアを愛する二人の政治家の絆は、この時からつながりを増していった。

\*\*\*

オースティアに変化が訪れている頃、リベラリアでは、ライロック・マディンがベアトリスに拳を上げていた。ベアトリスは怯まず彼と対峙する。

「仕事なのだ。提督の命は守らねばならない」

「貴様……!!」

ライロックは、振り上げた拳を振り下ろすことはしなかった。リベラリア現提督への忠義が、かろうじて憤怒を押さえ込んだ。ライロックの拳から逃れたベアトリスは、服を整えながらいう。

「ライロック殿の忠義、見事であります。リノアン卿よりも現提督への忠義を遵守したあなたの行動。提督はお喜びになられますぞ」

ベアトリスはそれだけを言って、カッカカと嗤いながら消えた。ライロックは壁を思い切り殴りつけて、怒りを露にする。

「くそっ！ くそっくそっ！」

この日、二ヶ月ぶりにリノアン・デュランの元を訪れたライロックは、リノアンの言動がおかしいことに気づいた。その原因となったのは、軍部大使——暗黒魔導士ベアトリス。リノアンの教育係に任命されたベアトリスが、リノアンに対して、ブレインストームの魔法をかけたのだ。

『不安を助長し、誰かに依存させる』黒魔術であるブレインストームは、対象者に自律的な精神を失わせ、誰かの傀儡となることを強要する。

「リノアン……」

ライロックは、自責の念に駆られる。彼はベアトリスの危険性を十分理解していたつもりだった。ベアトリスが教育係に任命された時、リノアンは不安そうにライロックを見て、怖いと言った。

何故、その時彼女に手を差し伸べなかったのか、ライロックは強い後悔を感じていた。

「何故あのとき、俺は彼女から離れた。何故」



ライロックは翌日、首都リベリアで提督に直訴する。国が戦争に勝つためなら、心優しき人の心を奪うことすら許されるのか。民は国のために存在する駒に過ぎないのか。

ライロックはそれを否定したかった。

「提督。何故、リノアンにブレインストームの魔法をかけさせたのですか」

「私を殺したいだろう、ライロック。だが、その殺意はできれば別のところに向けてくれ。リベリアは、今後の五年間が重要なのだ。十五歳の少女にはできぬ仕事だ。許せ」

ライロックは爪の先から血が出るほどに強く拳を握り、その痛みで提督への怒りを収めた。彼はリベリアの国家図書館に潜り、ブレインストームの解除方法を模索する。どの本を読み解いても、書いてあることは同じであった。

『暗黒魔法は不可逆の魔法であり、ブレインストームを解除することはできない』

それでもライロックは、リノアンにかけられた魔法を解除することをあきらめなかった。  
「必ず、あなたを元に戻す。それが俺にできる、償いだ」

オースティアとリベリア。

その未来は、光と闇の奏でる旋律の彼方へ。

本を作ろう、本で読もう



teapot-novels.com

《 続きは書籍でお楽しみください